

大 哉

お お い な る か な け ん げ ん

乾 元

Okamoto Seminar V

平成9年度
岡本貞雄ゼミナール
「学ぶ会」報告書

Okamoto Seminar. V

Contents

1st 『多様な生き方と、価値観』

広島テレビ
報道局副部長

徳永 博充 氏

5

2nd 『アメリカ放浪記』

株式会社大宮建鐵
取締役

花見 忠之 氏

17

3rd 『その人らしく生きるために』

広島総合病院
放射線腫瘍科主任部長

本家 好文 氏

29

4th 『外から見た日本』

広島経済大学
留学生

邱 剛 氏

41

5th 『21世紀の広島について』

広島市総務局
企画調整課長

濱本 康男 氏

53

6th 『私の生き方～思想的遍歴を経て～』

山下江法律事務所
弁護士

山下 江 氏

66

7th 『白髪が増える話』

(株)サンフレッチェ広島
広報部

佐伯 寛 氏

74

8th 『就職について』

(株)ザ・メディアジョン
CEO 代表取締役

山近 義幸 氏

91

海上自衛隊呉基地及び

江田島教育参考記念館見学報告

104

この冊子は平成9年5月から翌年3月まで、岡本ゼミナール5期生によって行われた学ぶ会、及びその活動をまとめたものです。

ご多用の中、ご協力いただいたきました多くの方々に、厚く御礼申し上げます。そして、これからもより一層のご指導とご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

岡本ゼミナール5期生一同

はじめに



大哉乾元も早いもので五巻目になりました。毎年積み重ねた学生諸君の努力が、このような形で残されていくことを嬉しく思っています。

毎月講師の方をお招きして、その講演内容を文章化していく作業は、一見なんでもないように見えますが、受け身だけで育った学生にとっては大変な作業です。詳細なマニュアルがあるわけではなく、自分の判断が要求される場面で四苦八苦していました。投げ出してしまった者もおりますし、先輩の作った物をまねて終わりにした者もいました。しかしながら、自分たちの学年（五期生）の誇りをかけて、最後にまとめあげた意地と努力に対して敬意を表します。

今回も多くの方々にお世話になりました。特に、ご多用の中を時間をさいてくださった、講師の方々には深く感謝いたしております。ありがとうございました。学生たちはこの体験をそれぞれの場面で生かしてくれるものと信じております。

学生の資質も年々変化しており、このような形がいつまで続けられるかとも思いますが、縁の続く限りはやっていきたいと願っております。今後ともご指導、ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

担当教員 岡本 貞雄

1st 徳永 博充 氏

『多様な生き方と、価値観』

海外に出ているんな人や場面に遭遇すると、自分たちとは違うんだなと意識することがあると思う。例えば、北欧に行って金髪の人の中で旅をしている時、違う国にいることを実感して孤独になるという具合に。

でも、孤独と同時に、違うという楽しさやうれしさを感じることもあってある。そういう肯定的な部分は、マスコミに携わる人間としてできるだけ伝えたい。

第1回学ぶ会

平成9年5月27日火曜日

講師 広島テレビ放送 報道局副部長

徳永 博充 氏



講師プロフィール

- 1949年 4月25日、広島に生まれる。
- 1972年 上智大学新聞学科卒業
- 1974年 広島テレビ放送に入社
総務課人事課、報道局報道部、東京支社営業部等を経る
- 1994年 NNNニューヨーク特派員
4月以降、報道局ニュースセンター情報部勤務
現在、報道局ニュースセンター情報部、ニュース担当デスク副部長

『多様な生き方と、価値観』

国際化とは

私は地方局の記者にしては少し異色な経験をしているのかもしれませんが。アメリカに滞在していたのは1991年から94年までの3年間でした。ちょうどバブル景気で日本が傲慢になっていたというか、アメリカが自信を失っていた時期だったんです。ソニーがコロンビア映画を、松下がMCA（映画会社ユニバーサルの親会社）を買収して、よくメディアで「日本がアメリカの魂を買った」というふうに取り上げられました。映画はアメリカの代表的な文化です。アメリカ人は映画に誇りを持っていますから、それを買収されたというのは大きなショックだった。アメリカ人の中で日本人に対する優越感が崩れ、敵対心が芽生え始めた時期でもあったと言えます。

よしにつけ悪しきにつけ、日本の躍進が国際社会において非常に目立っていた。傲慢な成金の日本に対する冷ややかな視線があって、そんな中で働いていたわけですが、私にとって決して居心地は悪くありませんでした。この頃、日本人が強迫観念のように繰り返していたのが「国際化」という言葉です。アメリカでは「国際化」は「Internationalization」と言いますが、私は3年間アメリカにいましたけど、この言葉を聞いたことなど一度もありません。なぜなら、アメリカにいる人や社会そのものが国際化されているので、このような言葉を必要としないからです。もちろんアメリカのような国際化の進んでいる国でありな

『SAPIO 1998・8・5』



日本バッシング

REPORT 1 ジャパンマネー

89年のソニーによるコロンビア映画と、翌年の松下電器によるMCA社の大型買収は、ジャパン・マネーのハリウッド進出、娯楽メディアの相乗効果を狙った戦略として大きな話題を呼ぶ。しかし、95年4月松下がMCA株をカナダの大手飲料メーカーのシーグラム社に売却、日本企業の見通しの甘さと、ハリウッドへの参入の難しさを浮き彫りにした。

がらモンロー主義(欧米両大陸の相互不干渉を主張するアメリカ合衆国の外交政策の原則)のように国内に閉じこもろうとする歴史的傾向はあります。

私の子供が幼稚園に通っていた頃、そこで仲の良かった友達の家族と一緒に食事をしました。アメリカでは仲の良い家族同士でよく食事をするのですが、その席で「日本人は違う人種の人と結婚することがあるのか」という質問をうけました。日本でのそれは「国際結婚」ということになりますから、英語にすると「International Marriage」になります。ところがそう言うとアメリカでは笑われてしまう。「国際結婚」などという言葉はアメリカには存在しないのです。せいぜい「異人種間の結婚」と表現されるくらいです。そういった意味で、海外で生活している人の常識、ずっと日本から出たことのない人の常識、そして世界の常識は違うものなのだと感じます。皆さんも異文化というものを肌で触れ、考えてみて下さい。

アメリカのジャーナリズム

ニューヨークにはアメリカのジャーナリズム、メディアがたくさん集積しています。それだけ社会、政治、文化、経済などニュースになるような素材があるということなのです。政治面では最近、国連を舞台にして展開されているところがあって、湾岸戦争でもその存在意義が問われたりしました。国際連合の本部はニューヨークです。社会面ではホームレスや人種差別等の問題が挙げられ、やはりニューヨークはアメリカの中では群を抜いている。経済面においてもニューヨークにあるウォール街、世界市場の中心地なくて語れない。私もニューヨークでいろんな面白い取材をしていきました。

アメリカのジャーナリズムは確かに軽薄な面もありますが、日本と比べて非常に重厚、かつ野心的で、奥が深いと感じました。NBC(米国3大放送局の一つ: National Broadcasting Company)の玄関にある大理

『SAPIO 1998・12・23』



ユーロの登場でウォール街も熱くなる

石には「Thy wisdom and knowledge shult be the stability of the time . (汝の知性と知識が時代の礎となる)」という言葉が刻まれています。これは非常に謙虚な言葉なんです。つまり、ジャーナリズムが人々を引っ張っていく、啓蒙的な役割を果たすというのではない。人間にはそもそも知性と知識があり、そのような人間が形成する成熟した社会の支えに過ぎないという意味合いがあるのです。ここにアメリカジャーナリズムの健全さを垣間見ることができます。

アメリカで質の高い新聞として挙げられるのが「ニューヨークタイムズ」です。一日50～60ページあり、日曜版だと100ページぐらいに増えます。一面記事も注目されている事件とか、事故を取り上げず、自社の価値観やスタンスを持って、深く調査または取材をした記事をトップにもってくる。なおかつ圧倒されるのが記事の量と分析の深さ。ニューヨークタイムズは難しい単語もよく使われていますが、質の高い情報を提供する伝統的なメディアです。このような伝統はテレビにもあり、映像でどのように見せるかという努力がなされている。レポーター、キャスターが洗練され、プロフェッショナルです。日本には帰属意識という言葉があって、上司に忠実か、あるいは会社に忠実かということが一つの基準になっているところがあります。しかしアメリカのジャーナリズムの基準は決してそのようなものではありません。何が正しくて、何が間違っているのかということ判断する。このような個人の意識というのが日本の企業、メディアとは違う部分ではないかと思います。

REPORT 2 アメリカと国連 ~ Peace Keeping Operation ~

実質、国連の中で力を持っているのは、アメリカ、イギリス、フランスの三国である。その中で、最も重要な位置にいるのがアメリカだ。

エジプト人で国連の前事務総長ガリ氏は、任期を残して辞めている。その背景には、アメリカとの対立があった。ガリ氏は「Peace for Agenda」政策を打ち出し、平和を強制させようとした。今までのPKO（国連平和維持活動）は、主に仲裁が目的だった。しかし何世紀も殺し合い、憎み合いが繰り返されている中東の歴史を知っていた彼は平和に反対する者を武力で制圧しに掛かった。平和は尊いものという彼の一徹な信念。アメリカも一時はそれに同調していたが、ソマリアで民族紛争があった時、アメリカの兵隊が殺され、死体をロープで引き回される姿が報道された。その映像は非常にナイーブなアメリカ人を刺激し、大統領はやむなく軍を戦地から引き上げさせた。それが対立の背景となっている。ちなみに残りの一期は、アフリカ出身のアナン氏が締めくくることとなった。

日本人とアメリカ人の文化の違い

日本とアメリカの摩擦をテーマに取材をして、4回のシリーズにまとめたことがあります。私はその取材から多くの日本人に摩擦を乗り越えようとする建設的な動きがあるということ、そのためには何が必要なのかということをお伝えしたのです。いくら人種が溶け合おうと努力したとしてもやはり「違いは違い」。昔よくニューヨークが「Big Apple」と形容され、一攫千金の夢がある、すてきな街と言われていました。しかし、現実には厳しい人種差別がある。いつまでも黒人は差別され続けている。そこで理想主義的な言葉「Melting Pot」が出てきた。ポットの中で人種や文化が混ざり合うという比喻ですが、現実とは程遠いものです。私は「違いは違い」として理解して、むしろそのことを楽しもう、お互いの調和の中で生活していこうとする意志が必要だと思う。

そして「Melting Pot」から発展して「Salada Bowl」という言葉が聞かれるようになりました。トマトがあり、レタスがあり、色々な野菜が盛り付けてある。それぞれが個性を持ちながら、サラダという一つの料理として成立している。やはり違いというものを活かさなければならない。髪の色とか皮膚の色とかほかの人種を真似ても日本人はやはり日本人なのです。ありのままの日本人として、他の人種との違いというものと上手く付き合っていく。私は「違い」というものを楽しいと思います。違うということに目をそむけたり、耳をふさいだりせず、楽しんでいただきたい。好奇心というか、物事に興味を持てばそのような感覚が鍛えられるのではないのでしょうか。よく、アメリカ人が何か起きた時に「What's up?」と言って集まってきますが、日本人にもそのような野次馬根性的な感覚というものを大事にして欲しいものです。

皆さんに感じて欲しいのは、「違い」を認め合う気持ち。「違い」は素晴らしい、面白いと感じることができれば、人間同士の諍いなど防げるのではないのでしょうか。アメリカから3年前、日本に帰って痛感したのが、日本人とアメリカ人の違いです。謙虚なるがゆえに日本人は無表情に見られるのか、それとも本当に無関心なのか、あるいはきちっとした心根を持った上での表情なのか。ちょっとわかりませんが、人である以上、マニュアルとかテクノロジーを越えた人間の優しさみたいなものを信じて欲しいと思っています。人間のやさしさというのは、弱いもの、虐げられるものへの配慮、同情、共感から生まれます。想像力をもってその人達の気持ちをわかってあげる力を是非身につけて下さい。

質疑応答

梅田真理子

なぜ、ジャーナリズムの世界に入られたのですか？

『SAPIO 1998・1・14』

講師

小、中学生の頃は、漠然と弁護士が記者になりたいと思っていたんです。それから年齢を重ねていくうちに世間様にお役に立てるといよりも、おもしろい仕事がしたくなって、テレビ局に入りました。表に出て形ばかりのことをする（アナウンサー）よりも、実のあることしたくて記者の道に進みました。



コロムビア大学院は優れた報道に対して与えられるピュリッツァー賞を主催している

「ジャーナリズム」というのは私にとって高邁な言葉です。心の中では、いつか本物のジャーナリストになりたいと思っています。それは世間の評価等より、自分の心に自問して「ジャーナリストに近づけたな」と感じられるようになることです。現在は後輩の面倒をみたり、原稿直しやニュースの項目づくり、演出を手がけたりしています。室内での仕事ですが、今でも現場の記者のつもりでいます。

工藤耕輔

警察官が嫌いと言いましたが、どうしてですか？

講師

権威を持っているがゆえの人に対する精神的、肉体的なプレッシャーを掛けているように感じるからです。権力の使い方を履き違えた人をたまに見掛けるが、そういうのが嫌い。「嫌い」というのは理論的でなく感情的な言葉であり、あまりにちゃんとした定義になっていません。私個人の一つの感情を、皆さんにぶつけるのは卑怯だと思いますが、そういう気持ちがある。力を持っているか、いないかという時、どちらかといえば持っていない人の立場に立ちたい。それが、記者の仕事をするモチベーション（動機）となっているのではないだろうか。

REPORT 3 ユダヤ人と日本人

徳永さんは交差点で警察に取り締まりを受けたが、納得がいらず友人のゴードン弁護士と共に裁判を起す。そして無罪となった徳永さんは裁判を通して、多くのユダヤ人が住む町スカーレスを知った。そこでユダヤ人の歴史や考え方を肌で感じたのだった。日本人の多くは、彼らに対し偏見を持っている。それは、世界の黒幕として汚いことを重ねてきたからだ。しかし、ユダヤ人の方はダビデ神殿を壊されて以降、世界を巡り、異質なものとして排除され続けていたという歴史がある。

十字軍は神聖なものとして伝えられているが、結局はユダヤ人を苦しめた。昔、ローマの傭兵として使われたドイツ人は多くのユダヤ人女性を襲った。そんな中でユダヤ人が生き残る上で身につけたことが金貸しだった。十字軍は、借金の形を消すためにユダヤ人を殺し、証文を焼却処分したのである。歴史をたどれば、故なき差別を徹底的に受けたのがユダヤ人の方であった。

池尻利行

違う人種や考え方の違う人がお互いを認めあって、争いを防いでいくのはもっともだと感じました。報道をするにあたって、ここははずせないと考えてる点や、これからこういう問題を取り上げてみたいという考えがあればお聞かせ下さい。

講師

海外に出ているんな人や場面に遭遇すると、自分たちとは違うんだなと意識することがあると思う。例えば、北欧に行って金髪の人の中で旅をしている時、違う国にいることを実感して孤独になるという具合に。でも、孤独と同時に、違うという楽しさやうれしさを感じることもあってある。そういう肯定的な部分は、マスコミに携わる人間としてできるだけ伝えたい。

古代ギリシア人たちは異教徒のことをバルバロイと言っていました。これは、言葉や文化の違う人を見下げるという意味があります。このように誰にでも自分達の方が上だという気持ちはあるでしょう。しかし、いろんな事を見たり、聞いたり、知ることにより、そのような気持ちをセーブする理性は絶対働くはずなのです。理性を働かせるということを通じて伝えていきたい。ただ一記者として、そのようなことに対してどういう切り口で迫っていけばいいのかということが分からないのが本音です。

REPORT 4 神戸からの伝言

阪神大震災は5000人ももの被害者を出し、多くの命を奪い去った。そのうちの一人に加藤真光さん（21）がいた。彼は夢に向かって一生懸命だった。両親もそんな一人っ子の息子を支えていった。彼の大学入学式に参加した母。彼は母のコートのポケットにそっと手紙を忍ばせた。その中には母に対する感謝の想いが綴られていた。あまりにも出来すぎたことに悲しみが増幅する。発見された時、とても無念そうな顔をして眠っていたという。結局あの手紙が彼の遺言状となった。

徳永さんはこの取材ビデオから、多くの被害者が出たということだけでなく、多くの夢を失った若者がいたことも知って欲しかったのではないかと。亡くなった彼と同じ年代の私たちにもそれぞれの夢がある。また、大学生活の中で夢を探そうとしている者もいる。そんな私たちの周りには、いつまでも見守ってくれている家族や友人達がいる。だからいくらでも夢を持ち、前に向かって生きて行ってほしい。また、生きるすばらしさを大切にしたい。それが阪神大震災のもう一つの教訓であると徳永さんは言いたかったのではないかと。

森田理恵子

ご講演の中で、日本人に優しさや表情がないと言われましたが。私たちが生きていく上でこういうことに気を付けていけばいいのではないかと。ということがありましたら教えて下さい。

講師

日本人に優しさがないとは言いましたが、優しい日本人はいるし、優しくなれる日本人もいると思っています。ただ、その優しさを伸ばせるのに伸ばそうとしていないように感じます。

日本人は人に対する興味が希薄です。人に興味を持つこと、また興味を持たれる人間になるよう自分を磨くことが必要です。

橋口千聖

祖父の話で、戦時中に宇品から軍隊が出ていたと聞きました。私は被爆したのも軍隊を出したのも、両方が広島だと思います。その両方を飲み込める広島にするには、どのようにすればよいとお考えでしょうか。

講師

まさにそれが私のテーマなんです。大戦中、戦争をバックアップしていた広島がどこかに戦場を作っていたという考え方もできる。この事を口先だけではなく、心の底で理解して欲しい。その上で、もし外国へ行くことがあったら、現地の人に広島的那种の歴史を話してあげたいと思いますよ。それから、アメリカで日本と言えば、「ニンテンドー」とか「スシ」など企業や食べ物しかイメージされなかったのですが、嬉しいことに最近では野茂英雄という野球選手がアメリカに進出してくれました。皆さんも将来は顔の見える日本人となって頑張ってください。

小倉恵子

メキシコやキューバへの興味はアメリカに行かれてから持たれたのでしょうか。また、アメリカの人々はメキシコやキューバをどのように思っているのでしょうか。

講師

ラテンに興味を持ったのはアメリカに行ってからです。

何語でしたか「グリンゴ」という言葉があるのですが、メキシコ人はのろまで怠惰で、貧乏だという意味なのだそうです。そのようにラテンの人たちは非常に見下げられていたところがありました。

ラテン圏でもあるキューバは昔、カストロが社会主義を宣言するなどの革命を起こしたため、アメリカと対立する格好となっています。アメリカはこのキューバに対して、経済制裁などの圧力を加えてきました。国連でこのような制裁は不当であると結論づけられているにも関わらず、いまだにいざこざが絶えません。しかし、このような制裁から解除されればキューバは必ず伸びる国です。教育レベルが高いですし、観光資源もある。しかも、アメリカから近い。おまけに安い人件費で生産、輸出もできるのです。

キューバは実にいい国です。社会主義なのに底抜けに明るいし、お人好しの人が多い。それだけ安全な国なのです。一度行ってみたい下さい。

感想

阿部文恵

これから「興味や関心のアンテナ」を広く持たなければならないと強く思えた講演だった。いろいろな所へ行きいろいろなものを見て、いろいろなものに触れた講師の方の話だったからおもしろかったし、説得力があった。世界の中で日本は、どうあるべきなのか。もっと広い視点から見なければと思った。

庭谷育壮

世界中の多くのニュースを我々は日々目にし、耳にしているが、こうして実際にその現場にいた人の話はさすがに興味深かった。世界的に物事を見ていくと、様々な文化や生活様式の違い、価値観や生き方があることを改めて感じた。その中でも特に考えさせられたのが、様々な人種間での対立問題だ。ビデオで戦争の残酷さを見て、そして徳永さんのお話を聞いて、なぜもっと平和にならないのかと悲しくなった。サラダボールのように人種間の違いはあっても、それを全体としてうまくサイクル出来たらすばらしい。世界の国々やそこで暮らす人々がもっとグローバルな視野を持ち、お互いを認め合い、海のような深い愛情を持てたらきっともっと戦いは減るのに、自分の力ではどうにもならないもどかしさがある。

谷本美紀

初めての学ぶ会で緊張しっぱなしだった。どれだけ自分が何も出来ないか、物事を知らないかを思いしらされた。徳永さんはとても良い方で、私たちの緊張をほぐして下さり、講演後の会食も楽しめた。印象的だった言葉は「サラダボール」で、今のゼミにピッタリだと思った。卒業するまでにおいしいサラダになればと願う。外国に行かれているので、考え方が大きいというか、自分が今まで型にとらわれていたり、視野が狭いということを感じた。違いは違いと受けとめ、違いを楽しみ、好奇心を持ち、笑顔を心掛け、自分に自信を持って頑張っていきたいと思う。

2nd 花見 忠之 氏

『アメリカ放浪記』

私が日本を離れて一番実感したのは「やはり自分は日本人である」ということです。周りが外国人ばかりだからそのように自覚し始めたのかはよく分かりませんが、「自分は日本人だから、このようにすべきだ」ということを考えられるようになったのはよかったと思っています。

第二回学ぶ会報告書

平成9年6月17日

講師 花見 忠之氏

おおみやけんてつ
(株式会社大宮建鐵取締役)



略歴

1952年 広島で生まれる

1971年3月 広島修道高校卒業

10月 渡米

72年9月 ボストンのミュージアム
スクールへ入学

日本食レストラン「へにはな紅花」

でアルバイトをする傍ら、ボストン、ロサンゼルス、ノックス
ビルテネシー等を放浪

92年 帰国後、現在大宮建鐵取締役

演題 「アメリカ放浪記」



私の中のアメリカ

アメリカで放浪するつもりはなく、結果的にそうなってしまったのですが、最初は絵の勉強をする目的で日本から旅立ちました。日本の芸術大学に合格するというのは大変難しいことなのです。覚悟はしていたのですが、結局浪人することになって、どうせならアメリカで絵の勉強をしておもうと思いはじめました。ちょうど伯母からもボストンにいい美術学校があると聞かされていたので、アメリカ行きを決心しました。



ロサンゼルス街角

以前から伯母は時折小包み等を送ってくれていて、開けると何とも言えない「香り」が漂ってくるんです。何だか甘酸っぱいような独特の「香り」。そこから「これがアメリカなんだ」という先入観を抱き始めたものです。

私がアメリカに旅立った1971年は、まだ成田空港が開港しておらず、羽田から飛行機が出ていた頃です。アメリカに到着して、飛行機のドアが開いた瞬間、生の空気を吸い込んだのですが、以前から抱いていたあの「香り」とは異なっていたのでショックだったのを今でも憶えています。「なんだ、日本と同じなんだ」と思うと同時に、「やっぱり、同じ地球上であることに変わりはないんだな」ということを強く実感しました。

また言葉の違いということも痛感しました。日本では中学校から英語の勉強をしますが、その時ほど日本で教えられている英語は何だったのであろうかと考えさせられたことはありません。相手の言葉を理解するというのが一番大変でした。ですから、半年ほど語学学校に通って、まずは英語を分かるように訓練したのです。

言葉を理解するにはまず耳を慣らす機会を持つことです。このような機会を持つことは一昔よりも可能だと思います。例えばテレビや映画などから頻繁に生の英語に触れてみるといいのではないのでしょうか。

始まりはボストン

ボストンには7年近く滞在していたので、私にとっては第二の故郷と言えます。美術学校にも入学し、3年程通っていました。その間、日本レストラン「紅花」でアルバイトして、後にそこで働くことになったのです。住んでいたところがケンブリッジという町のハーバードスクウェアとって、ハーバード大学のすぐ裏にありました。ですから、ハーバードのキャンパス内をくぐって、美術学校やアルバイトに通うといった生活を送っていました。

ボストンからデトロイドのすぐ北がカナダだったので、学生時代なんかはビザがあればよく出かけていきました。ところが学生でなくなると、規則でアメリカ国外へ出るのもままならなくなります。そこで、グリーンカード（アメリカ政府が外国人に対して発行する永住許可書）を取得するために、紅花で働いていたのです。カードを取得した後、カナダのモントリオールやケベック、オタワを旅して回りました。アメリカとカナダにまたがったところにナイアガラの滝があります。あれはアメリカから眺めるよりもカナダ側から見た方がきれいです。



サンフランシスコ

次にノックスビルテネシーという町に移りました。ちょうどその頃、1982年にアメリカでもほとんどの人が知らないという万博があったというのが移った理由です。シーズンパス（開催期間中ならいつでも入場できる）チケットを買っていったんですけど、何が展示されていたのか今では思い出せないくらいいたものではありませんでした。

ボストンで一緒に働いていた仲間の一人がフロリダのケープケネディにいたということを知り、遊びに行ったり、キー・ウエストという町にも立ち寄ったりしたものです。特にキー・ウエストは晴れた日にキューバが眺められるほどのアメリカ最南端の町で、トロピカルな雰囲気のあるところでした。

自動車で大陸横断

ノックスビルテネシーから今度はロサンゼルスに移りました。車でのアメリカ横断は初挑戦だったこともあり、要領が掴めず、かなり厳しい旅でした。地図を手に入れ、距離を計算しながら自分なりに計画は立てたものの、なかなかままなりません。夜遅くガソリン不足になり、スタンドまでガス欠寸前の状態で走ったこともありました。

ロサンゼルスに着いてからは近郊を色々と回りました。その後、カルフォルニア、ラスベガスと渡っていったわけですが、特に印象強いのがラスベガス。ここは砂漠の中にあるので、冬でも温かいというイメージを持つかもしれませんが、それは大きな間違いです。冬にラスベガスに行かれる方がいらっしゃいましたら、気温をご確認下さい。私は冬のラスベガスでマイナス19度という痛い体験をしたことがあります。

日本を離れて感じたこと

車で東から西へと旅をする。目的地に向かう途中に見つけることが出来る町並み。そこを歩くことを私は面白く感じます。アメリカという国は意外と大きな町は少ないものです。もしかしたら、日本の町の方が大きいのではないかと感じることもあります。しかし、それぞれの町に活気というものをを感じる。ニューヨークやボストンなど夜でも賑やかです。活気というものは町中の雰囲気で大体分かります。

私がデトロイトに行った頃はちょうど自動車企業が衰退していた時期でした。昼間のダウンタウンには結構人がいますが、夕方になると黒人ばかりが残っている状態です。ロサンゼルスは町自体の面積がかなり広く、ダウンタウンの雰囲気がデトロイトに似て、寂しい感じがしました。

私が日本を離れて一番実感したのは「やはり自分は日本人である」ということです。周りが外国人ばかりだからそのように自覚し始めたのかはよく分かりませんが、「自分は日本人だから、このようにすべきだ」ということを考えられるようになったのはよかったと思っています。

質疑応答 Q & A

Question 旅をすると世界が広がるとよく言われますが、花見さんがアメリカへ行かれて、お気づきになったことなどを聞かせてください。

Answer アメリカから日本に帰ってきた時に、まずアメリカと日本の差を感じましたが、だんだんアメリカと日本の違和感がなくなってきたと思います。

Question 花見さんがアメリカに滞在していて、日本との違いを一番最初に感じられたのは、何をされていた時ですか。

Answer 日本ではないと感じたのはやはり言葉の違いでした。そして、アメリカの公園は緑が多く、リスなど、きれいな環境でないといいような小動物がいたというのには驚きました。

Question アメリカは銃の携帯も許されていますし、私には犯罪大国というイメージが強いのですが、旅をされている時や、仕事をされている時など事件に巻き込まれたり、またそのような場面を目撃したことがありますか？

Answer 幸い事件に巻き込まれたことはないです。確かに銃の携帯は自由ですが、州によって法律が違ってきます。東部の方はだんだん銃規制がされてきていますが、西の方はまだまだ自由です。やはり、危ない所に近づかないことが一番だと思います。ニューヨークだったら、とにかく表通りを歩くことです。絶対に裏通りは歩かないで下さい。



Question 私は本で、ハーバードビジネス関係の方が紅花のケーススタディという研修をしているのを拝見して、大変おもしろく感じました。よろしかったらもう少し紅花のお話をしていただきたいのですが。



Answer 紅花はもともと日本橋にあるお店で、ロッキー青木というレスリングのオリンピック選手がアメリカ遠征した際に、ビジネスとして始めたようです。お客さんの目の前にある鉄板の上でステーキを焼くというスタイルがうけ、話題になりました。またお客さんに口を開けさせ、その中に食べ物をぼんと飛ばしてみせたりと衝動的なことをして見せていました。僕が最初に入った時は12件位しかなかったんですけど、今では全米に50件以上あります。最初のうちは、メンバーを日本から集めていたようで、その人達はある程度年数が経ったら自分の店を開いていました。僕と同期の人もニューヨークの郊外にそういうスタイルでステーキハウスを開いています。



Question 広告や新聞に取り上げられるくらい大変有名なシェフでいらしたようですが、なぜ辞めてしまわれたのですか？

Answer 年齢的にこの仕事はせいぜい130代が限界だと感じていました。今でこそ40代位で現役という方はおられますが、かなりの重労働です。ある程度の年齢になればマネージャーや自分の店を持つというスタイルでやっていかないと、体力的にきついです。

Question 若い頃絵を描いていらしゃったようですが、どのような絵をお描きになっていたのですか？また、その事がご自身の人生にどのような影響を与えたのかお聞かせください。

Answer 日本にいる時は、デザイン方面を目指しておりました。日本は水彩画の方が人気があるようですが、アメリカではむしろ油絵の方があったみたいです。我々が若かった頃は、ポップアートが主流を占めていました。スーパーリアリズムやネオリアリズムという、写真のような実物に近い作品を作っていたように思います。その影響かどうか分かりませんが、鉄板では一番最初にもやしを焼くんですけど、それを使って新婚さん等にはハートの形にしたり、色々なかたちで絵を描いていたことが仕事に生きていたと思います。

Question アメリカに行かれてカルチャーショックはありましたか？

Answer やはり、車の運転です。車は日本では左側通行ですが、アメリカでは右側通行なので戸惑いました。そして、アメリカでは交通手段が車だけだったので、バスや電車などの公共施設の利用の仕方に困りました。

Question アメリカに馴染みにくい人はどんなタイプですか？

Answer 人付き合いの嫌いな人はアメリカでの生活に馴染みにくいでしょう。しかし、それだけに人付き合いが上手になるという考え方もできます。人付き合いが上手く行くと楽しい生活が送れると思います。



ゴールデンゲートブリッジ

立食のマナーについて

ビュッフェとは

日本で一般的に言われている立食パーティーのことです。フランス語で“簡単な食事”という意味で、どちらにしる格式ばらない気楽な食事形式。パイキングになっており、料理は自分自身で取ります。

小皿へ取るときの注意

ビュッフェは料理を小皿に取るようになっていきます。そこで気を付けたいのが一緒にとつてはいけないものです。例えば、熱い料理と冷たい料理のような相反するものは同じ皿にのせてしまうと料理の味を損なうため、やってはいけないことです。

料理を取る順番

料理をとる順番は、基本的にフルコースと同じです。ただ、かなりの混雑が予想出来るため、順番に取ることができないようであれば、別の料理をとっても構いません。

「フルコースの順番」
「オードブル 魚料理 肉料理 デザート」



立食の風景

小テーブルの役割

料理をのせているメインテーブルとは別に、小テーブルがあります。これは、歓談中に皿を下に置きたい時のほかに、いらなくなった皿を片づけるために使います。残った物は、皿の隅に寄せておきましょう。また、皿は重ねて置かないのが基本ですが、重ねた方が見苦しくない時は重ねておきましょう。



その他大切なことは次の通りです

- 1、料理を取ったらテーブルから離れるようにしましょう。多くの人がテーブルの料理を各自の小皿にとっていくため、他の人の邪魔にならないようにしましょう。
- 2、食べながら歩くことはやめましょう。近くの人の所へいきたいときは、食べ物を飲み込んでからにしましょう。
- 3、基本的に料理の皿は左手、飲み物は右手に持つようになっています。また、歓談中は料理を小テーブルに置いて、グラスだけ持って歓談しましょう。

最後に、会場では常に周囲に気を配りましょう

おしゃべりに夢中になると、手を振ったりして人やテーブルにぶつかることがあります。常に周囲に気を配って、飲み物や料理をこぼして会食を台無しにしないようにしましょう。また、目上の人のお料理をお取りすることを忘れないようにしましょう。面倒くさがって人に言われるまで取りに行かないような確信犯的行動は嫌われるかもしれません。

感想

伊妻 猛

自分は日本人でありながら、日本についてあまり知らないのではないかと思います。外国へ行って外に目を向けることにより、初めて日本が見えてくる。同じように「自分」というものも見つめることができるのではないのでしょうか。20年という長い間、アメリカで過ごされた花見さんとお会いしてそう感じました。私も海外へ出るときは「自分」をしっかり見つめてみたいです。

吉川 真琴

写真を見たり、お話を聞いたりして、花見さんがとても人生を楽しんでいることを知りました。人にはそれぞれ、その時にしかできないことがあると思います。1つのチャンスをものにできるかできないかは、自分次第。その時々を大切にしていけば、自分の満足できる人生を歩めるということを感じました。

六車 善伸

海外に行かれて、必死で英語を話しても通じず、今まで習ってきた英語はなんだったのかと言っておられたのを聞き、初めて自分が海外に行ったときもそうだったので、みんな同じ思いをしているものなのだなということを感じた。花見さんのお話から、いろんな所に行くというんな事が見えてくることが分かり、自分もいろんな所に行きたくなった。

岡本 貞雄

物事の価値を金で換算するという癖がついてしまっている方もおられます。日本全体がそういう傾向にあり、その中で、それ以外の価値観というものをきちんと持っておられる方は大変貴重だと思います。花見さんのように、『自分の心の赴くままに』という気持ちを持ち続けられ、時代を過ごしてきたという方のお話を聞かせていただいたということは、我々にとって非常に貴重な体験だったと思います。皆さんの今後の人生の中に折り込んでもらえたら良いのではないのでしょうか。

3rd **本家 好文 氏**

『その人らしく生きるために』

皆さんと同じ20歳ぐらいの人ががんで入院して、死を目前にしているという現状があります。一番危ないのは、死を受け入れないという姿勢でいることです。それはそれで“その人らしさ”ですから、尊重してやっていけばいい。それよりも考えなければいけないのは、大半の人が死ぬ間際になって真面目に過ごそうなどと考えることです。沢山の亡くなる人を見てやはり感じるのは、最後だけかっこよく死のうと思ってもできないということです。わがままに生きてきた人はわがままに死んでしまうし、人に冷たくしてきた人は最後まで人から冷たくされて死んでしまうものなのです。そのところを頭の片隅に置いて頂きたいと思います。

死んだ後の世界はあります。体が死んだからといって全てが終わるわけではありません。「どうして自分は死ななければいけないのか」というこの世で一番難しい問題を考えることが大切なのではないのでしょうか。

若い皆さんにも必ず死というものが訪れます。それは決して避けては通れません。様々な事件から死を考えるチャンスはいくらでもあると思います。今回の話が、皆さんにとって「死」とはどういうものかと考えるきっかけになれば幸いです。

Lecture

その人らしく生きるために

死と日本人

今はまだ、「ターミナルケア」「ホスピス」という言葉だけが独り歩きしていて、具体的なことまではあまり理解されていない場合があります。

日本人は「死」というものを避け、そのことについて話し合ったりはしま409号室という病室番号がないところにも「死」を避けているということが表れています。もちろん日本の家庭で、「死」について話し合う機会なんてあまりないでしょう。

ところが私たちぐらいの年齢になりますと、実際に同世代の方ががんにかかる場合もあります。また、自分たちの両親もがん発病の適齢期に達してしまいます。今のところ私の両親は健康なんですけど、70歳を過ぎ、いつがんになるか分かりません。平均寿命に近くなってきた人は、死というものを生々しく感じてしまい、がんになった場合どうするかというような話をちょっとでも切り出しますと嫌な顔をします。

そういう日本の一般的風潮がある中で、突然がんという病気になった人に対して、そのことを伝えてもいいのかということが、まず問題として挙げられるわけです。本人が元気な時に家族で話し合い、自分の意志を表明していればその通りに進めていけるのですが、日

頃そのような機会はありません。しかも大学の医学部にすら死というものが教育の中に入っていません。従って、がんの告知の仕方や、それに伴う精神的なケアなどという部分についての講義は積極的に行われていません。そんな教育の下で学んだ学生ですので、国家試験に合格した後、現場に入った途端、戸惑ってしまう場合がほとんどです。このような現状を変えるため、死の問題を医学教育の中に入れていく方向に転換しつつあります。

放射線治療は再発したとか、転移したとか、手術ができない方に対して行

本家 好文

広島総合病院放射線腫瘍科主任部長

ほんけ よしふみ

1945年、広島市生まれ。

1975年、広島大学医学部を卒業後、同大医学部付属病院、広島赤十字・原爆病院、放線医学総合研究病院部などに勤務。

1985年9月よりJA広島厚生連広島総合病院放射線腫瘍科主任部長。

1996年9月、英国セント・ペーター・カレッジにて緩和医療の研修。

本家 好文 氏

広島総合病院放射線腫瘍科主任部長

ほんけ よしふみ

1945年、広島市生まれ。

1975年、広島大学医学部を卒業後、同大医学部付属病院、広島赤十字・原爆病院、放線医学総合研究病院などに勤務。

1985年9月よりJA広島厚生連広島総合病院放射線腫瘍科主任部長。

1996年9月、英国セント・ペーター・カレッジにて緩和医療の研修。



死と日本人

今はまだ、「ターミナルケア」、「ホスピス」という言葉だけが独り歩きしていて、具体的なことまではあまり理解されていない場合があります。

日本人は「死」というものを避け、そのことについて話し合ったりはしまし409号室という病室番号がないところにも「死」を避けているということが表れています。もちろん日本の家庭で、「死」について話し合う機会なんてあまりないでしょう。

ところが私たちぐらいの年齢になりますと、実際に同世代の方ががんにかかる場合もあります。また、自分たちの両親もがん発病の適齢期に達してしまします。今のところ私の両親は健康なのですが、70歳を過ぎ、いつがんになるか分かりません。平均寿命に近くなってきた人は、死というものを生々しく感じてしまい、がんになった場合どうするかというような話をちょっと

でも切り出しますと嫌な顔をします。

そういう日本の一般的風潮がある中で、突然がんという病気になった人に対して、そのことを伝えてもいいのかということが、まず問題として挙げられるわけです。本人が元気な時に家族で話し合い、自分の意志を表明していればその通りに進めていけるのですが、日頃そのような機会はありません。しかも大学の医学部にすら死というものが教育の中に入っていません。従って、がんの告知の仕方や、それに伴う精神的なケアなどという部分についての講義は積極的に行われていません。そんな教育の下で学んだ学生ですので、国家試験に合格した後、現場に入った途端、戸惑ってしまう場合がほとんどです。このような現状を変えるため、死の問題を医学教育の中に入れていく方向に転換しつつあります。

放射線治療は再発したとか、転移したとか、手術ができない方に対して行

うことが多く、結果として容態が変わらない場合がほとんどなのです。そのような治療を受けている方たちを担当していますと、どうしても最期「死を看取る」というところまで関わらざるを得なくなります。そして、現在のようにターミナルケアとか、ホスピスというものに関心を持つようになってきました。

もともとは治らないがンをなんとかかして治してやろうという気持ちで私は医者になりました。学生時代、あるいは卒業した後の医療現場でも、医者としては少しでも長生きしてもらうことが最も重要なことであると教育されてきました。ですから、もう亡くなると分かっている、いろんな薬剤を使うことが当たり前のように行われてきましたし、呼吸が止まっていようとでも平気で人工呼吸器を付けるなどということも行われてきました。ただ、そんなことをしていながらも、自分や親にはこんなことはされたくないなという思いはずっとありました。けれども、大学病院という大きな組織に身を置いていますと、目上の先生もいますし、どうしても自分勝手な事ができません。

そこから出て主治医になり、自分の小さな城を持てるようになって、初めて自分なりに考えることができるようになりました。実際、患者さんと距離が近くなり、その人が望んでいることについても話し合えるようになったのです。そして、だんだんと延命第一主義から手を引くことになったのだと思います。

告知— 真実を伝えるということ

実は、最近のがんの治療法の進歩というのはある程度頭打ちというところまできていて、その治し具合というのは遅々として向上していません。けれども、がんの苦痛をとるという主義に基づいた医療はどんどん進歩してきています。がんで苦しんでいる人がいれば、それは明らかに医療側の責任で、十分なケアがなされていないということですし、痛みをなんとかしてほしいと患者さんの方からどんどんアピールすべき時代になってきているということなのです。

医者ですから、何とか病気を治して、患者さんの家族に良い知らせをしたいという心理がどうしても働きます。仕事だからといっても、「再発しました」「転移しました」などという悪い知らせはしたくないものです。現在では、悪い知らせでも告知できるという医師が増えてきました。しかし、悪い知らせを上手に患者さんたちに伝えられる技術を持った医者は非常に少なく、とにかく事務的に事実だけを言い放つような場合が多いというのが現状です。無論、本人に隠す方が非常に難しいといわれる現在でも、未だに自身の口から「あなたはがんです」と言わない医者もいます。

今までのがん告知は患者を飛ばして、まず家族にされていました。そのやり方が、がんの告知を非常に難しくしている原因でした。治らないがんだと知って、「告知して下さい」と言う家族の人はそんなにいるはずがありません。先に家族に告知すると、必然的に

患者に告知されないという方向になってしまいます。外国では、そのようなやり方は許されていません。なぜなら、患者さんの情報を家族に相談すること自体がいくら身内とはいえ、個人のプライバシーを侵していると考えられているからです。まず患者に伝えて、その上で「家族に伝えますか」と相談するのがアメリカのスタイルです。もちろん、それをそのまま日本にもってあげればいいというわけではありません。最近の日本では、病気の結果を言う時、本人と家族とが一緒に座ってもらい、医者自身は患者さんと話をするというスタイルをとっています。患者さん自身が病気のことをどう思っているのかを家族の人にその場で聞いてもらうようにすれば、より一層本人の希望に近づくことができるのではないかと。告知の場に本人と家族を同席させるのにはそのような狙いがあるからです。



広島総合病院

心を繋ぐコミュニケーションの工夫
できるだけその人が最期までその人らしく生きてもらえるようにサポートするという考え方がホスピスとかターミナルケアの理念です。

その人らしくという時に、本人が病気のことを知らない状態、つまり騙されたままではその人らしさというのが何なのかを考えることが非常に難しくなります。それだけ告知というものが重要になってくるのです。辛い告知になっても、どうやったらコミュニケーションをとっていいのかという工夫をしていくことが求められてきていると思います。

回診の時、病室のベッドで寝ている患者さんの側について、白衣姿で立ちながら「どうですか」などと声を掛けます。そういう状況では、なかなか患者さんの本心や悩みを引き出すことはできません。そこで、ホスピスやターミナルケアをやっていく場合、まず患者さんの側で座って話をするというのが基本となります。座り方にもいろいろあって、例えば恋人同士が4人掛けのテーブルに座る時は、向かい合うより90度斜め隣に座る方がより親密度が増します。このようにコミュニケーションの工夫をしながら患者さんと意思の疎通を測っていければいいのではないのでしょうか。

ターミナルケアの研修でもコミュニケーションの取り方などが取りあげられています。そこでも医者が白衣を着て、寝巻を着た患者さんに、面と向かって、となればよけいに威圧感を感じるので、時々視線がクロスする90

度横の位置に座るようにすればお互いがリラックスできると言われています。また、外来での診察時には、患者さんに左斜め前に座ってもらいなさいということもよく言われました。ちょうどカルテが見える位置に座ってもらい、何も隠していないということをアピールするためです。その他、患者さんと話をしている時に、ちらっと時計を見るとか、外を見るとか、何気ない些細な素振りが不信感を与えるということも教育されています。

旅立つ人のためにできること

全ての人のがんになるわけではありませんが、死ぬということは避けられません。その避けられない「死」というものがないと、どう生きたらいいのか考えはしないとします。「死」に直面して初めて、こんなこともしたい、あんなこともしたい、こう生きたいという考えが働くのではないのでしょうか。

しかし、不思議なことに限られた時間しか残されていないと分かった時でも、特別なことをしたがる人はそんなにはいないものです。「こう生きたい」ということが、今まで通りに生活がしたい、家に帰って家族と普通に過ごしたいという場合がほとんどなのです。ただ、その中にも人それぞれで希望が違うということを踏まえながら、その人がどうしたいかということ聞いた上で、援護していくというのがターミナルケアの基本だろろうと思います。

「死」ということを避けて医療がなされていた頃は、最期の場面になって医師が患者と家族を離していました。

しかし最近では、出来るだけ両者を離さずに別れるように心がけています。「さよなら」の言葉を言えるかどうかで、残される者の満足感というものが随分違ってくるということにも配慮するようになりました。

最近、「インフォームド Consent」という言葉が話題になっています。直訳すると「説明と同意」という意味になりますが、今までの日本医療特有の「お任せ医療」に対する批判、そしてこれからどうあるべきかという問いかけがこの言葉が話題になった背景になっているのではないのでしょうか。確かに、医療知識のない患者さんにどんな医療方法を選択するかと問いかけてもなかなか決められないものです。ですから必然的に「インフォームド Consent」は確率の問題になってきます。成功率が何パーセントだから、この方法でという勧め方をするのが医者であると考えられてきました。いずれにせよ、ここまですすめるためには病名の告知というものが欠かせなくなります。できるだけ正確な情報を提起して、何度も念を押しながら、その人の考え方や意思を尊重していくというのが今後の医療だろろうと思います。ですから、他人事としてではなく、常に自分に置き換えて考えていくことが必要なのではないのでしょうか。もちろん、「死」というものに直面したことがないのでどこまで想像できるのかわかりません。しかし、私たちが言えるのは「一生懸命わかってとしています」ということだけなのです。

Interview

Q がんには良性と悪性があるそうですが、どう違うのですか。

A 放っておいたら限りなく大きくなるとか、転移するという点で良性、悪性の区別をしています。ただ、良性だから手術をしなくてもいいというわけではありません。例えば、大腸ポリープは悪性化する可能性が高いと言われていいますので、良性であっても切除するというのが原則です。

Q 「安楽死」についての見解を教えてください。

A 日本では法律上認められていないというのが現状です。しかし、「安楽死」についての問題は多々起きています。率直に言えば、もっと症状をとる方法が残されているはずなのに、積極的に安楽死を実行することは問題だと私自身は思います。

薬剤を調合し、ただちに心臓の動きを止める前に、症状に合わせた処置の方法が発展しているのだから、そのような知識をもっと学ぶべきです。全ての医者が様々な症状からくる痛みにもっと関心を持つべきだし、そのようなことを学ぶ教育体制を確立していく方が大事ではないでしょうか。

Q あと残り少ない時間しか残されていないと告知された方がパニックに陥り、自ら命を絶とうとすることもあると思います。そのようなケースに応じた対策のようなものがあるのでしょうか。

A 自殺を恐れて告知できなかったという時代は確かにありました。例えば、訴訟を起こされるのではないだろうかとか、責任を追及されるのではないだろうかというような問題にもなりかねないわけです。しかし私の経験上に限って言えば、告知したために自殺されたということはありません。ただ、様々な事例を見ると、痛みとかそれに伴う苦痛というものを放ったらかしにしていたために、自殺された方はいらっしやるようです。それでもこの場合、告知が直接の原因になっているとは言い切れません。仮に遠回しに関連があったとしても、そういう方は特殊だと考えないと告知は積極的にされなくなってしまおうでしょう。

自ら命を絶とうとする方にハッキリとした対策はありません。とにかく、医療者としてできる限りのことをやっているという姿勢さえ感じて頂ければ自殺する患者さんはいないと思います。

Q がんという病気のもつイメージの大きさに自分らしさを失ってしまいそうです。がんに向かっていく心構えはどうあるべきか教えて下さい。

A がんだけが治らない病気のように扱われていますが、絶対治らない病気ではありません。確率的に言えば、心臓の血管が詰まる心筋梗塞や、肝臓が硬くなり、機能が悪くなる肝硬変という病気と変わりありません。ちなみに5年間の生存率は、肝硬変、がんのいずれも約4割となります。

そんなことを念頭におきつつ、心構えとしては、やはり最初は戦うという姿勢も必要であるということです。本人の意欲がなければ治る病気も治りません。また同時に、ささいなことだと思っても聞きたいことがあればきちっと聞くことが大切です。医者が忙しそうだから聞きづらいという患者さんや家族の方がたくさんいます。もちろん聞こうという雰囲気を作っていない医者側にも問題があるのかもしれないのですが、とにかく、自分の命に関わることなのでお任せにせず、その点においては自立すべきだと思います。

Q 20代ぐらいの若い年代がどのくらいの割合でがんにかかるのか。また、どのような症状が出るのか教えて下さい。

A 15～20歳前後は最も病気が少ない世代と言えます。ですから、がんはまずないと思っていただいて構いません。特殊な例として、白血病などにかかる場合もありますが、大腸がんや胃がんにかかるということはほとんどありません。

症状ですが、髪の毛と爪と歯以外はどこからでも表れてきます。もちろん、できた場所によって症状は変わってきます。場合によっては、それが早期発見に関わってきます。例えば声帯に5ミリのがんができたとします。しかし、それだけで声がかれたりします。声がかれるなんてことは日常よくあることです。判断が難しくなるわけです。治りやすいがんと治りにくいがんというのがやっぱりあって、自覚しづらく、体の奥にあるがんは治しにくい。自覚できればそれだけ早期発見につながりますので、治る確率も高くなるでしょう。

(平成9年7月4日 講演)

Impression

石川 綾子

私にとって、「死」というものは身近ではない。「死」がわけもなく襲ってきてすぐ側にあるような気がしていた時もあったけど、今の私にはピンとこない。それは全てが「死」とは無縁のところ、うまく幸せに廻ってるからなのだろう。しかし、「死」というものが根底になければ、「生」もまた、あやふやなものになってしまうだろう。

「死」の捉え方・迎え方・受け入れ方、そんなことを教わり、考えさせられた。そのことにより、自分の「生」も見えてきたような気がする。また、「死」が全ての終わりではないということを知った。そこから生まれてくるものがあるのだと。そして、残るということも、身体はなくなってしまっても、願わなくとも、生まれてきた以上、何かを残すのだと。その人が存在したということ。いろんなものに。私がある自分の存在を嫌いだった頃、死ぬとしたら自分の全部を一緒に殺してしまっていた。残したくはなかった。けれど今は、私が死を迎えた時、私の愛する人が私の身体の一部を必要としていると知ら、そこまでして生きたいのだと言ったとしたら、まだやりたいことがあるのだとしたら、使ってもらいたい。誰にでもという訳にはまだいかないけど、今は愛する人がいっぱい増えるといいなと思う。死と向き合う時、それを受け止め、乗り越える力を持っていたいと思う。死を迎える時、安らかに

ありたい、幸せでありたい。独りじゃないといいな、最後まで自分でありたい。そこに近づけるのが、ホスピスの根本なのではないかと自分なりに思った。そして、ホスピスに限らず、周りもそうであってほしいし、そう接したい。私らしい死を迎えるために、私らしく生きたい。今回の学ぶ会で人として得た物は大きかったと思う。

伊妻 猛

「死」というものは、常々考えてはいたが、今回の学ぶ会で生きることの大切さと「死」への考え方を再認識させられた。放射線科の本家先生はがんを中心に話されて、私のおばや母もがんにかかり、最近手術したばかりで、私にとってはとてもタイムリーな話であった。がん＝死というイメージを今まで強く感じていたが、実際そうではないわけなので、近いうちにおばや母に今回の話をしてあげたい。日本の食事では「死」についてあまり話すこともなく、私の家庭でも例外ではない。講演後の食事の時も始終暗い雰囲気だったが、私はそれでよかったと思う。これを機会に家庭でも話してみようと思う。講演のなかで20歳で今、がんという病と闘っている話を聞いて深い悲しみを覚えた。今、私に出来ることは、その瞬間を精一杯生きることである。長生きできる保障はないから、明日死ぬかもわからない。でも、もし死んだとしても、悔いのない人生を送る

ことができたと言えるような生き方を
目指したい。

小川 美代子

以前、知人が「人間には死が二度訪れる」という話をしてくれました。その話によると一度目の死は肉体が減びる時で、二度目の死は人々の記憶の中から自分が欠落していく時なのだそうです。それである意味キリストが永遠の命に例えられている事を知りました。私は肉体が減びる事に関しては、そんなに怖くありません。しかし、自分を知っていた人達の記憶から消されてしまう事に関しては、すごくさみしく思えます。だから、生きている間は家族や友人達と深い思い出を作るために時間を費やしたいなと思います。

橋本 泰孝

死という言葉を改めて考えるのも大切ではないかと思う。命あるものは、いつか消えるものだけど、その消えてしまいが寿命だったり、事故だったり、その訪れ方によって、その死を見守っていた者の心境は様々だろう。今回は死というものを感じた人への身体的な介護はもちろん、さらに精神面でのケアの難しさ、大切さを感じさせられたお話だった。自分が死ぬと感じたとき何を考えるかは分からない。自分らしさを失うことなく生きられるか、自分が死ぬという事をうまく人に伝えられるか不安は尽きない。病名を伝えられてからどのくらい生きられるかわからないけれど、医者が専門家としてではなく、一人の人として自分と接し

てくれたら、恐怖というものはかなり薄れていくのではないかと思う。ホスピス、ターミナルケアなど、言葉でしか聞いたことがなかったけれど、それがいかに大切であり、必要であるかを強く感じた。遠くに感じていることが近くに感じられた。

藤野 高正

今の自分には関係ないと思ってた「死」だけれど、今から考えても決して早すぎることはないことがわかった。自分が死ぬと何人が悲しむ人がいるだろうけれど、周りの人よりも自分が死ぬということを考えようと思った。人間はいずれは死ぬのだから、どうせ死ぬのならいい死に方、自分らしい死に方をしたい。いくら頭がよくても、自分には医者は努まらないだろう。

岡本 先生

たいへん重いお話でした。しかし、私はこのようなことを考えるのが人間として当たり前だと思います。このようなことを認識したうえで楽しみ、遊びができない、今の世の中がおかしいのではないのでしょうか。死を知らずして、生きていくことほど無責任なことはありません。今回本家先生がお話しして下さったことをゼミ生全員が心の中に入れ、自分自身で考えながら日々をすごしてもらいたいと願います。ゼミ生のこれからの人生に非常に大切なことをお話いただいた本家先生に感謝いたします。

Books

『がんを知るとき伝えるとき』

本家好文 家の光協会出版

医療者の知識不足により、多くの患者を苦しめている我が国の医療現場に一石を投ずるこの作品。緩和ケアを実践していく中で出会った数多くの患者さんたちを通じて、学び、経験した著者の思いが凝縮されている。

『死とどう向き合うか』

アルフォンス・デーケン NHK出版

突然のがん告知、身近な人を襲う死、そしていつかは必ず訪れる自分の死。この世に生を受けた全てのものにとって、死は避けられない現実である。私たちは、この「死」とどう向き合って生きていきたいのだろうか。

『「死の医学」への序章』

柳田国男 新潮社

「死」をタブー視してはいけない。「死」を考えることによって、より充足した「生」を得ることができるのだから。自らの死を直視し、闘病期を綴って逝った精神科医の軌跡を辿り、終末期医療のあり方を考える。

『ここが僕たちのホスピス』

山崎章郎 東京出版

著者が一般病院でターミナルケアに取り組んでいたころから、現在の聖ヨハネ・ホスピスに身を置くまでの軌跡を描く。重兼芳子氏をはじめとするさまざまな人々との出会いの中でみつめてきた命の輝きとは何か。

『「死への準備」日記』

千葉敦子 朝日新聞社

がんに侵されながらも、ジャーナリストとして活動し続けた著者。自らの生存期間を見据え、生と死の問題を扱った著作は十数冊に上った。「朝日ジャーナル」に連載されていたこの作品は後世への遺言ともとれる。

『生と死の接点』

河合隼雄 岩波書店

グリムの昔話やミヒヤエル・エンデの『モモ』。具体的な臨床例などわかりやすいモデルで、老いや死など“人生の後半”の課題について、深い考察をめぐらす一冊。現代は、生と死の均衡が崩れているとの警鐘も。

4th

邱剛氏

『外から見た日本』

私は中国でガイドのアルバイトをしていたことがあります。観光客をあちこちに案内する仕事だったので結構忙しかったです。欧米の旅行者等はその国の文化や歴史について尋ねてくるのですが、日本人の旅行者は、「疲れた」、「休憩はまだか」、「安い買い物が出来るところはどこか」と言うばかり。欧米の旅行者は、仕事は仕事で旅行はリフレッシュとして楽しんでいるのですが、日本の旅行者は疲れるために旅行しているように見えました。日本人は仕事帰りの電車の中でも、みんな眠っています。日本という国全体がどこか無理をしているような気がしてなりません。

第4回学ば会

平成9年9月24日

題目「外から見た日本」

講師 邱 剛 氏

【講師プロフィール】

1970年4月8日 吉林省
長春市生まれ
1982年 外国語学校
日本語専攻
中学・高校6年間で
寮生活で過ごす
1988年 北京外語大学
日本文学専攻
1997年 日本企業数社の北京
駐在事務所に勤務
5月 広島経済大学
経済学部経済学科入学



豊かさに囲まれた日本は限りなく 悪い方向へ向かっている

『SAPIO 98・10・14』



日本の若者が向かう先は？

私の日本への訪問は今回を含めまして4回になります。ほとんど仕事の出張というかたちで毎年一回、いずれも一ヶ月以上の滞在でした。その度に日本は変わったなと、つくづく感じていました。日本で生活している方々にとってはあまり感じられないことだと思いますが、一外国人から見れば日本は激しく変化していると言えます。

以前、大阪の梅田へ行った時、赤信号を無視している大勢の人を見て大変驚きました。信号など、交通ルールを守らない人が増えているのは、その地域が悪い方向に向かっている一つの表れではないかと思います。幸いにも広島では、赤信号で横断歩道を渡っている人の姿はあまり見かけません。

設備の質に感激、しかし
学生の質には幻滅

広島経済大学に来る前までは、「地方の私立大学だからあまりたいした学校ではないだろう」と思っていました。しかし、入学してから、「素晴らしいな」と感心してしまいました。まずキャンパスの雰囲気です。建物はオレンジ色で、見ると心が落ち着きます。それに、立派な体育館、図書館があり感心しました。何より驚いたのが各教室にクーラーが付いているということです。私の卒業した北京外国語大学も一応地元では名門なのですが、こちらと比べて設備が整っていないということを感じました。日本の学生は幸せだと思います。

入学直後はこちらの大学で4年間勉強できることに幸せを感じていたのですが、講義に出てみてがっかりしました。他学年の講義はどうか分かりませんが、1年生の講義は本当に騒々しい。講義が始まって約50分ぐらいの間に、ぞろぞろゴキブリのように学生が教室を出たり、入ったりしています。例え方が悪いですが、本当にそういう印象を持ちました。後から入ってきても堂々としていますし、先生の話など聞こうともしない。それどころか、講義を真面目にうけている人におかまいなしに私語をする。

「中国には遅刻する大学生など一人

もない」とは言いませんが、圧倒的に少なく、いたとしても一人か二人ぐらいです。それに遅刻したら静かに入室し、後ろの席に座っておとなしく講義を受けるというのが中国の常識です。ですから余計にショックを受けました。先生のほうにも責任はあります。騒々しい教室の中で平気で講義を進めるというのは、本気で勉強している学生を無視していることでもあります。言い過ぎかもしれませんが、それでは学費泥棒をしているようなものではないでしょうか。

イメージを変えたがる心理

何より驚きなのは、若い日本人の茶髪現象です。キャンパス内にいると、学生全員が茶髪にしているのではないかと錯覚してしまうくらいよく見かけ

ます。人間の価値観はそれぞれ違いますが、いくら流行といってもこんなに多くの人が茶髪にしているのは、どこかおかしいのではないかと思います。何人かに茶髪にしている理由を聞いてみたのですが、その答えは皆さん同じようなものでした。

例えば「自分の好きな歌手が茶髪にしているから」という意見。人間には他人と同じ行動をとる心理があるので、これは理解しやすいです。それと興味深かったのが、「自分のイメージを変えたい」という意見でした。考えてみたら、自分のイメージを変える手段などそれほど多くはありません。普段のとは違う雰囲気の服を着てみたり、化粧を試してみたりするくらいしかやりようがないわけです。美容手術という手段もありますがお金がか

『SAPIO 97・9・24』



上海復旦大学

明日の中国へ向けて 「21世紀、100の重点大学」

中国の大学進学率は100人に2、3人。大学生というだけで、既にエリートとされるにも関わらず、入学後でも勉強に対する熱意は冷めることを知らない。放課後、エアコンのない教室に居残って黙々と勉強続ける学生が一番の関心事は「語学力」を身につけること。特に外国語学部の「英語コース」はそのような学生のあこがれの的である。

中国では「211工程」という国家プロジェクトが推進されている。これは国内にある1000以上の大学からさらに100校を選び抜き、重点的に建設を行うという計画。選ばれた大学は特別に、政府から補助金が与えられる。しかし、選ばれるためには施設、学術、指導者など各方面において高いレベルが要求される。そのため大学によっては学生に対し、厳しい管理を施しているところもあるようだ。実質的に「211工程」が建設し終わるためには5～15年の歳月が要するのではないかとされている。

かることなので若い人たちはそんなに利用しないでしょう。

中国には上海や広東などの経済発達地域で茶髪にしている人を見かけるものの、ほとんどの人はしていません。また、欧米人も自分の髪の色を変えようとしません。日本人はどうしてそんなに変えたがるのか、そうしなければならないのは何故か。そのことを自分なりに考えてみました。



英才教育が盛んな中国・上海の私立学校の様子

経済の発展のみに目を向け 人間らしい生活を忘れている

国全体が無理をしている
ように見える

ここ2、3年、日本各地で起きた一連の悪質な犯罪事件、例えば中学生が起こした神戸の殺人事件とかオウム真理教のサリン事件は皆さんの記憶にも新しいことと思います。このような悪質な事件が短いサイクルで起きている。これはおそらく、戦後日本が経済面ばかりに目を向けて発展させてきたツケではないかと思えます。日本人が人間らしく生活するという考えを考えないままに、ここまで来たということではないでしょうか。

私は中国でガイドのアルバイトをしていたことがあります。観光客をあちこちに案内する仕事だったので結構忙しかったです。欧米の旅行者等はその国の文化や歴史について尋ねてくるのですが、日本人の旅行者は、「疲れた」

「休憩はまだか」、「安い買い物が出てくるところはどこか」と言うばかり。欧米の旅行者は、仕事は仕事で旅行はリフレッシュとして楽しんでいるのですが、日本の旅行者は疲れるために旅行しているように見えました。日本人は仕事帰りの電車の中でも、みんな眠っています。日本という国全体がどこか無理をしているような気がしてなりません。

中国という国からイメージできることは、広い土地、または過密した人口なのではないでしょうか。確かに人口は13億人、世界の4分の1を占めています。経済面から見ると世界のどの国にとっても、魅力的な大きな市場です。よく例えに挙げられますが、中国人一人一足ずつ靴を買えば13億足の靴になるという、極端ですがそれくらい莫大な規模なのです。

第15回中国共産党大会(1997年9月12~18日)

新体制で行われた共産党の党大会で、江沢民総書記は「株式制を国有企業改革に導入する」と発言した。いわゆる「国営企業の株式会社化」が党大会の最大のテーマだったのである。企画経済下ではモノさえ作れば売れていたのだが、市場経済化が進むにつれ、気に入ったモノしか買わない消費者が増え始めた。それにより国営企業が品質やファッション性を無視して、生産したモノを単に売りさばっていた時代は終焉を迎えることとなった。優秀な会社の株式を公開して合理化を図ったり、経営に難がある会社を外国資本に売ったりするなど、中国の市場経済化はますます急速化している。

台湾在住の経済評論家の邱永漢氏はこのような中国の動きに注目する。

「中国人は商業的でバクチの大好きな国民で、土地の次に投機の対象となるのは株だから、私は今後、香港の株式市場と上海の株式市場が世界の一大カジノになると見ている。つまり、中国の株式市場に世界のお金が集中する時代がくることはほとんど間違いない」(『SAPIO 1997・10・22』)。

中国政府は1994年以降、2回に分けて優良国有企業株を香港市場に上場した。これから、企業中心の社会に変化しようとしている中国が日本にどのような影響を及ぼすのか。

そして、面積は日本の26倍、皆さんの想像もつかないほど広いわけです。道から地平線がみえるところもあります。歴史も長く、5千年と言われていきます。西安あたりの道や田舎の畑を深く掘れば必ずなんらかの文物が出てくるというくらいです。普通の考え方では多分、中国という国を理解することは難しいと思います。

このような国を一つにまとめる力の源は中央集権主義にあるのではないかと思っています。いわゆる、社会主義制度です。世間では社会主義制度の終わりが謳われていますが、中国の社会主義はしばらくの間続いていくのではないかと私は考えています。中国はいずれ資本主義に変わっていくことでしょう。しかしながら、今のところ社会主義が中国の現状に一番合うのでは

ないかと思います。もちろん、色々な問題や矛盾もあります。

最近、中国で閉幕した「第15回中国共産党大会」で正式に株式制度を導入するという方針が打ち出されることになりました。これから資本主義の経済制度を本格的に導入して、それと同時に社会主義の政治制度を引き続いて行うということになるのではないのでしょうか。いずれにしても、これから中国は大変困難な時期、変換期に入るというところですよ。それは日本にとっても一つの大きな隣国のことですので、良くなる、悪くなるに関わらず影響はとても大きいと思います。私は今後も日本と中国が良い関係でいられることを願わずにはられません。

質疑応答

Q 中国が資本主義化されていく上で、デメリットがあるとすればそれはどんなことでしょうか？

A 今、中国は大きな転換期を迎えているところです。ところが、それによって現在、荒れた若者が増えています。古い体制から新しい体制へ変化していくことで、いろいろな考え方が模索され始め、混乱している状態なのでしょう。その動揺の中でも前向きに生きていこうとする若者も結構います。

今までの中国は共産主義、マルクス主義の教育を行ってきました。新しい体制になっていくことでこれまでの教育に多少なりとも疑問を持ち始めている人は少なくありません。だから、あちこち海外に行ったり、国内で企業を起こす人が増えているのではないのでしょうか。とにかくこれからの社会に対する不安があることは間違いありません。

Q お話を聞いて、日本の若者の精神年齢は中国の若者と比べて低いのではないかという印象を受けました。日本の若者がもっと大人になるためにはどういった考え方、意識が必要だと思われませんか？

A 私から言わせれば、今の日本の若者はモルモットのようなものです。働かなくても生きていける時代に甘えている。以前まではどこかの

会社に入っていれば、一生そちらの給料や、退職金に頼って生活できる状況でした。しかし、そのような日本の社会は根本的に変わりました。ある意味で頼るべきものはなくなったわけです。だから、自分なりに能力を身につけていないと、これから社会では生きていけないということを認識すべきです。つまり他人と違う自分を確立しなければならないということです。

中国は人口が多いだけに競争が激しい。大学を卒業しなければ就職先がありません。自分のやりたい職業に就きたい一心で、どうしても大学入学を希望する人が多くなってしまいます。そのような激しい競争社会の中で育った若者は、精神的に自立し、とてもよく物事を考えています。

日本の大学生も今まで通りに構えているようでは社会の変化についていけなくなるでしょう。

Q 中国では「教育」というものがどのように考えられているのでしょうか。

A 地方によって違いがあると思います。例えば私の故郷の長春では、小・中学生は宿題を家に持って帰らないようにしています。つまり、宿題は全部学校でやって、家に帰ったらしっかり遊ぶという教育的な目的があるのです。授業の内容もこれから新しい制度を導入しながら改革していこうという段階になってきています。

教育に対する様々な価値

中国の貴州省と雲南省を取材した際、現地の学校をいくつか訪れたというジャーナリストの落合信彦氏はそこで「教育」が国の基本であるということを変更して実感したと語る（『SAPIO 1997・9・24』）。落合氏が取材した地域の多くは、食べることもままならないような極貧の村村だったが、地元の政府関係者は口々にこう嘆く。

「貧しくて教育を受けられないから字が読めない。字が読めないから新しい農業技法を教えても理解できないし、出稼ぎに行きたくてもいけない。それがまた貧困を生むのです」。

貧しさゆえに学校に行けない子供たちがうらやましそうに外から授業風景を眺めている。こんな世界があるということ日本人は想像できるだろうか。

「今の日本では、まず経済的に学校に行けないという人はいないから、教育の大切さはなかなか実感できない。できれば学校なんて行きたくない人さえ多いのではないか」「教育レベルが同等の先進国を見渡しても、日本と欧米の一番の違いは教育のあり方だといえるだろう。この違いはこれからジワジワと利いてくる」。

教育とは何であるか 日本は今一度、この原点に立ち返らなければならない。ぬるま湯の中でその価値さえも忘れられている日本の教育が再び甦ることはあるのだろうか。

そんな日本と対照的なのがシンガポール。小学校入学から大学卒業までの15年間、気の抜けない競争を続けなければならない。例え、大学に入学したとしても在学中の成績が就職に直接影響し、出来によっては初任給にまで差が生じるといふ凄まじさ。この競争に勝てなければ貧乏人はずっと貧乏のまま。このように完全な能力主義を貫くシンガポールでは「教育」が生活や人生に直結するほどの価値をもっているのだ。日本の教育の場にはそのような緊張感はない。

これからの教育は学生が自主的に考え、学んでいくことを目的として制度を作っていく方向に向かっています。例えば、学生に正確な答えがでない問題を考えさせたり、環境破壊や中国と日本の友好関係をどう考えるかというような議題でクラス全員で一緒に討論してもらおうといった授業形式が導入されていくようです。おそらく日本も似たような方向で教育改革がなされていくことでしょう。中国と日本、また韓国は似たような教育形式だと言われていますが、これからは世界各国、特に

アジア諸国から教育を変えていかなければいけないと思います。

Q 中国の一人っ子制度についてどう思われていますか？

A 中国の現状を考えれば、一人っ子政策は実施していかなくてはならないでしょう。中国の土地面積は世界の7分の1ですけど、人口は世界の4分の1。数字的にもこれ以上人口が増えると、国内だけで全ての民

族を抱えていくことはできなくなります。その結果、中国人のイメージを悪くしている密入国の問題に発展してしまうのです。中国は人が多い上に住む場所も、食べるものも、着るものにも不自由している。もし、一人っ子政策が実施されなかったら、どんどん中国人は海外に出て行かなければならなくなることでしょう。

漢民族は完全に一人しか産むことが許されていませんので、もし二人産んでしまったら、3千元から5千元ぐらいの罰金が課せられる。これは一般的なサラリーマンだと2年分の年収に相当します。ただし、少数民族の場合であれば一人以上産むことが許されています。

Q 中国の華僑の人達と日本の企業の人達との根本的な違いというのは何だと思われませんか。

A 民族性なのかも知れませんが、日本人には柔軟性が足りず、自分たちの固定観念をそのまま海外に持ち込み、上手くいかない場合が多い。中国で事業を展開している日本企業が成功している例は全体の約3分の1だそうです。残りのほとんどが派遣スタッフと中国人スタッフとの間で妙なごたごたがあって、関係が上手くいかなくなるというパターンで失敗しています。その原因として、派遣スタッフが中国の民族性について、あまり勉強しなかったという点が挙げられます。自分と同じように他人も行動

をとってもらわなくてはいけないという気持ちが日本人にあるのではないかと思います。

華僑の人は柔軟性を持って、どの国でも忍耐強く生きていけます。そして訪れた場所で、自分なりの事業を展開することができる人種なのです。実のところ、今では華僑のそのような姿が中国人の典型だと思われる節があります。上手く現地人とつき合って、相手にあわせて自分の利益を最大に作っていく強靱性は中国人の典型だとさえ言われているのです。

Q 学生からまた社会人になられる時、自分で起業してみようという考えはありますか。

A 様々な経験をしたと言っても、例えば人前で話すチャンスなどなかなか持つことができませんでした。今日も皆さんにお話ししたいことをいろいろ準備してきましたが、結局ほんの一部しか消化できませんでした。そういった意味ではまだまだですし、経験も足りません。

自分には起業したいという気持ちがありません。それよりもいろいろな本を読んだり、どこかに旅行に行ったりできる自分の時間を持っていたいです。実は将来ヨーロッパとかアメリカで生活してみたいという思いがあります。日本で2、3年勉強した後、中国の情勢を見ながら、自分の進路を決めたいと思っています。

感想

阿部文恵

外から日本はどう思われているのか、気になっていたから、邱さんの話を聞いて良かったです。これからの日本をどうするかは、若い私達にかかっているのではないだろうか。まず最初はマナーの悪さを直し、一人一人が気をつけていかなければならないと思う。他の国々の文化に敬意を払わないときちんとした扱いを受けられないだろう。

石川綾子

逃げている。そう思った。日本という国は、人は。逃げてきた結果の日本が、今あるのだと。

邱さんの言われた「日本人は考えることをしない。今の日本は、考えなくても生きていける」という言葉が、心に残った。言いわけはいくらでもあるのだけど、結局そういうことなのだと思う。利己的、刹那的生き方。都合がよく、楽な方へと流れる。その中はずっばりはまっている自分が、とてもイヤだ。どんな事に対しても、向き合えるようにならないと。

今回は、自分の住んでいる日本という国について、自分が日本人であるという事について、考えさせられた。表面だけではなく、深く求めるようになっていたいと思った。焦りは禁物だけど、変な安心感の中に積もっていてもしょうがないので、自分なりにあがいていこうと思う。

石川直子

邱さんの話は分かり易く、端的に私たちの年代や日本への問題を提起して下さったので、とても集中できていたように思います。

現在の中国も、日本が抱えているような、しかも差し迫った問題を背負っているという話には親近感をおぼえたとし、それに際して中国が変換期を迎えていると邱さんが真剣な表情で言われたときには、このままじゃいけないという焦りも感じた。自分の中でいろいろ考えるよい契機をもらった会でした。

橋本泰孝

日本で生まれ、育ち、日本人であるという限り、絶対的に感じる事ができない外から観た日本。経済的には上位レベルにいる日本だが、人間的レベルとなるとまだまだだと思った。大学の生徒の授業態度が悪いと講師の方が言われていたが、話を良く聞くまではさして感じなかったが、今はひどいと思う授業がけっこうあるのではと思った。又、現在おこっている悪質な犯罪は、戦後の高度成長の経済発展のツケではないかという話も興味が深かった。

日本のダメな点について話が多かったが、納得させられる点もあり、大変おもしろかった。

脱・「遊学」宣言 ～宮城大学の挑戦～

宮城大学は1997年に4月に開学。事業構想学部（事業計画学科、デザイン情報）と看護学部（看護学科）の2学部で構成されている。大学設立の費用は240億。新しい公立大学を目指すこの大学が現在様々な方面から注目されている。

例えばユニークな名前の事業構想学部では入学時から学生にノート・パソコンを買わせ、全員必修で講義を受けさせている。また、講師陣には元民間企業の管理職や公認会計士、大新聞の論説委員など多彩な顔ぶれとなっている。

初代学長の野田一夫氏（多摩大学名誉学長）は「宮城大学は学問を習うためではなく、目的を達成するために学問を学ぶ」（『SAPIO 1997・9・24』）という理念で、“県民のために稼ぐ大学”をめざす。その一環として、同大学は地元・宮城県の行政改革プラン「経済自立10ヶ年計画」の実験プロジェクトに賛同する形で「宮城大学総合研究所」という収益団体を設立した。今後、この研究所を通じて、受託研究や調査の他、社会人を対象とした英語講座、留学企画などを実行していく予定だ。

もう一つの看護学部ではただ看護婦を育成するという従来の枠を超えた「ホスピタリティ・マネジメント」が教え込まれる。看護婦不足に悩んでいる地方公共団体は多い。宮城大学は病気の人を看護することに留まらず、“人間に対するケア”という広い視点で看護婦資格を持ちながらいろいろな企業やサービス産業の現場で働いていける人材養成を目指している。

実学を重視したこのような大学作りが日本の大学教育の状況を少しずつ変えていくものとなり得るか。宮城大学では学生が市民や地元企業とパイプを持ち、実際に事業計画を立て、実行していくことで、そのシステムを学んでいる。大学が社会に出る前のモラトリアムとして終わるのではなく、国家が担える人材を育成する場となる日はそう遠くはない。

『SAPIO 97・9・24』



宮城大学

5 t h 濱本 康男 氏

『21世紀の広島について』

今まで東京にあるものを欲しがって、それを作ろうという発想がありました。そういう発想で成立するのはせいぜい大阪まで。あれだけの人口が近畿圏にあるから可能なのです。それ以外の都市がやれば経営的に失敗する確立の方が高いと思います。東京で売っているブランド商品を全く同じように広島でも買えるようにしたとしてもどこか無理があります。東京にしかないようなブランド店を広島に出したって意味がない。欲しい人は東京まで買いに行くわけですから。それよりも逆に広島にしかないブランドがあれば東京から買いに来るはず。そうやって地域が個性を発揮して、バランスがとれていくことが大切なのです。

第5回 学ぶ会

(平成9年10月30日)



講師

広島市企画総務局企画調整課長
濱本 康男氏

【講師プロフィール】

昭和27年 6月20日、広島市で生まれる
昭和51年 広島市役所採用
昭和60年 総務局人事部組織管理係長
昭和62年 総務局人事課人事係長
昭和63年 総務局人事課課長補佐

平成4年 財団法人広島アジア競技大会
組織委員会へ出向（運営要員
課長）
平成7年 市民局振興課長
平成9年 企画総務局企画調整課長に就任
（市の施策の総合調整を担当）
平成10年 市民国際平和推進室長に就任

講演議題

「21世紀の広島について」

政令指定都市とは

地方自治法第252条の19～21により、政令で指定される人口50万人以上の市で、大都市行政の特殊性に応じて一般の市長村とは異なった行財政上の特例を設けたもの。実際には人口100万人以上の市が制定されている。

政令指定都市には、道府県または知事などの事務権限のうち、福祉、衛生、都市計画などの18項目が一致して移譲されるほか、個別法により市内の国・県道の管理などの権限も委譲されており、いわば都道府県並に扱われている。政令指定都市は、市の事務を分掌させるため、市内をいくつかの区に分け、区別に区役所を置き、区長以下の市職員を配属させている。

1956年に制度化され、同年に大阪市、京都市、名古屋市、横浜市、神戸市、63年に北九州市、72年に札幌市、川崎市、福岡市、80年に広島市、89年に仙台市、92年に千葉市が制定され、現在は12市。埼玉の浦和・大宮・与野市では合併により、政令指定都市への昇格を目指す動きがある。

広島と福岡の活気の違いは民間企業の元気の差でもある

広島という都市の魅力について市民にアンケート調査を行ってみると、「国際色豊かである」、「若い世代が多い」、「公園等の緑が豊かである」という意見が多いです。その他、「パツとしない」、「遊ぶところが少ない」、「あやふやな感じ」という声もあります。確かにその通りだと感じますし、だからこそ広島をもう少し魅力のある都市にしたい。そのために何をしていったら良いかということ私は企画調整局という市の重要な施策に携わっていく中で考えています。

広島はよく「元気のいい大阪と福岡に挟まれ活気がない」と言われます。つい

この間もキリンビールが広島工場を閉鎖するという発表をしました。このままで広島がますます地盤沈下するのではないかという声が新聞にも掲載されています。そんな広島と比較される福岡ですが、次々と新しい再開発事業が進められていて、見かけは大変活気があります。しかし、福岡にも色々と抱えている問題があるのです。

福岡は民間会社の元気がいい。いわゆる地場企業なのですが、広島だとマツダや広島銀行、中国電力といったところでしょうか。しかし、現在それらの会社はあまり元気がありません。マツダにいたっては一時、販売戦略が失敗して、大変な状態でした。今でこそ随分立ち直り

次代を開く福岡・流通戦争

福岡市・天神は大型店舗が集積している町だ。この地で繰り広げられる流通戦争は不況化の昨今においても絶え間なく拡大し続けている。

1996年9月、老舗の岩田屋は若者をターゲットに「新館Zサイド」をこの天神に開業した。しかし、天神の百貨店の売上高はZサイド開業前の5割増ほどで留まり、不況下ということからオーバーストア（店舗過剰）の感を誰もが抱いている。その一方で、繁華街・中州に近い博多区住吉に1996年4月開業したキャナルシティ博多など、顧客吸引力のある店舗は少なくないという見方もある。そして1998年、福岡市中心部で新商業施設が相次ぐように完成を予定している。

例えば4月、西日本鉄道グループが天神にある福岡三越と岩田屋の間に「ソラリアステージビル」を開業。生活雑貨専門店や大型ビアレストランなど今までの天神にないタイプの店を揃える予定だ。また、博多区下川端には1300億円強を投じた三つのビルからなる「博多リパレイン」が3月に開業する。そして、市西部にあたる福岡ドーム周辺では大型アミューズメント施設、ライブホール、複合映画館を備えた商業ゾーンをダイエーグループが建設。ドーム地区の開発がこの商業ゾーンを中心に行われている。JR博多駅前のバスセンターも商業ビルに衣替える。大型書店やアミューズメント施設に加え、吉本興業の劇場も出来るというこのビルは5月に開業予定。当分の間、天神を軸とした福岡の商業集積が進んでいきそうな気配だ。

関東圏を基盤としている家電量販店のコジマやヤマダ電機が九州進出を本格化させた。今後安売りを武器に地元大手のベスト電器としのぎを削ることになるだろう。このような専門店業界の勢力争いの激化はなにも広島に限ったものではないのである。消費が冷え込む中で「勝者なき戦い」と題した福岡・流通戦争は一層熱く燃え上がっている。

広島市広域商圏

「広島家電戦争」に代表されるように、ここ数年大型店の出店が相次いでいる。特に八木・緑井地区の変貌は目覚ましく、新たな商業拠点として集客力を高めつつある。市が進めるJR緑井駅前再開発は郊外型商業ゾーンの玄関口を目指し、2002年に完成が予定されている。その大型商業施設の核テナントに「マイカルサティ」が名乗りを上げた。今後、紙屋町・八丁堀地区と広島駅・段原地区などに並ぶ主要商圏として注目されることであろう。

を見せていますが、それでも一番よかった91年頃に比べればまだまだです。また、広銀などの金融業界も厳しい。どこの銀行もそうですが、バブル景気時に沢山の土地を担保で抱えていたため、土地が下がってしまった現在、危機的状況になっています。中国電力などの電力会社だって例外ではありません。以前まで電気は電力会社だけが売っていましたが、今では工場を持っている会社でも自社で電気を作っています。例えば、福山にあるNKKという製鉄会社は自社で余った電力を中国電力に売っている。また、中国電力がその電力を一般向けに売っています。中国電力だって、今までのように作って売れば売れるという時代ではなく、現在、社内的な経営の見直しがなされています。

福岡の場合、例えばダイエーがドーム球場を作ったり、また、福岡に大きな開発をする会社がありますが、そこが天神の方の開発をしたりしています。広島と福岡の活力の差は、民間企業の活力の差でもあるのです。

この間、福岡市の職員と話をする機会がありました。市はほとんど開発にタッチしていないにも関わらず、「福岡市は良いですね」と羨ましがられるので、その職員は少し照れくさそうでした。

広島町の町にもそれなりに新しいものが

作られています。皆さんもご存知のように緑井周辺が開発され始めています。段原にはサティが出来ましたし、新しい商圏として楽しみな場所が増えてきました。それから広島駅周辺にも大きなビルが新たに建ち始めています。この件にも市が株式会社の形態を取って関わっていますが、口に出せない苦勞をいろいろやってあそこまでこぎつけることができた事業なのです。ただ広島と違い、福岡はちょうど景気がピークだった頃に一連の事業を進めている。一方その頃、広島ではアジア大会に向けての準備で祇園新道やアストラムラインの建設をやっていました。そもそも都市の再開発の場合は事業に移す前に調整ごとを済ませなければなりません。広島駅前の開発は土地権利のについての調整が手間取り、建設工事に入れないという厄介な状態でした。

そしてバブルがはじけ、やっと調整が済んだ頃には広島は財政が苦しい状態になってしまっていたのです。波に乗るタイミングを福岡は掴めたが、広島は掴めませんでした。結局それが今の差を生むことになったのだと思います。でも、それを運命みたいなものと諦めずに、もっと知恵を出せばいいわけです。今の広島に問われているのは、そういう部分なのではないでしょうか。

広島にしかないブランドがあれば
他から人が集まってくる

広島の方々からの意見で「広島発のものがもっとあったらいいのではないか」とか、「ないものを付け足すのではなく、あるものを活かして町を作って欲しい」というような非常におもしろい声があります。実は今、「広島発」がいろいろと考えられています。これからの時代、全国どここの都市でもあるようなものを作って競争しているようでは、大都市に勝つことはできない。結局、東京の一人勝ちで終わってしまう。例えば「東京ディズニーランド」があんな規模を維持できているのも莫大な人口を持つ東京都の近くにあるからです。広島だとそうはいきません。「東京ディズニーランド」は年間入場者数は1600万人です。広島の市民球場が年間100万人くらいですから、それだけ比べても一定の規模の都市が持てる施設というのは周辺を含めた人口によって制約されるということが分かります。「呉ポートピアランド」ぐらいの規模でも維持するのがなかなか難しいわけですから、同じようなことを東京と広島が始めていくと、必ず東京が勝つ。だったら、小さいところはずっと連戦連敗かというところではなく、小さいところは



呉ポートピアランド

広島県呉市の第3セクター遊園地。スペインのリゾートをイメージして建てられた。開園から6年半で経営が破綻し、98年8月末に閉園。負債は133億円に達する。

きいところには絶対に出来ないことをすれば良いわけです。それが最近はやりの「町興し」ということになります。

例えば、湯布院ではアマチュア映画祭が行われています。小さな温泉の街ですが、湯布院にある温泉と自然を活かして、このような新しいイベントで人を集めています。東京には湯布院のような温泉は出ないわけですから、この場合は湯布院の勝ちになるのです。地域特有のモノを上手く見つけだして、それを組み合わせさせて町を作っていくと、新しい魅力が生まれてきます。

今まで東京にあるものを欲しがって、それを作ろうという発想がありました。そういう発想で成立するのはせいぜい大阪まで。あれだけの人口が近畿圏にあるから可能なのです。それ以外の都市がやれば経営的に失敗する確立の方が高いと思います。東京で売っているブランド商品を全く同じように広島でも買えるようにしたとしてもどこか無理があります。東京にしかないようなブランド店を広島に出したって意味がない。欲しい人は東

「あるモノ」を活かして！ ～アストラムラインと路面電車の改善～

【新交通システム3路線案】

西部丘陵都市線：西広島駅接続ルートを優先的に整備する案。約6km延長で整備事業費は約800億円の見込み。

東西線：高架、または地下で整備する案。約6km延長となり、整備事業費は高架で約800億円、地下で約1600億円の見込み。

南北線：広島大学本部跡地付近までを優先的に整備する案。約1.4km延長、整備事業は約600億円の見込み。

【路面電車網の改善案】

平和大通りルート：西観音町から白神社前までの約1.8kmで平和大通りの中央に軌道を設定する案。

相生通りルート：相生通りの路面電車を十日市から西へ延長する案。

京まで買いに行くわけですから。それよりも逆に広島にしかないブランドがあれば東京から買いに来るはず。そうやって地域が個性を發揮して、バランスがとれていくことが大切なのです。

広島市内には6本の川が流れていますが、100万都市の中でこんなにきれいな川が流れているところは他にありません。ですから、この川をなんとか活かさないだろうかということが言われています。確かに周辺の住民にとって、川は交通渋滞の元凶になっているのかもしれませんが。しかし、このような川でさえも広島にとっては大きな財産なのです。自分の目の前にあるものだけに財産という見方ができにくいのかもかもしれません。また、川の側に河岸緑地という散歩道がありますが、あれをもっときれいにして、カフェテラスや喫茶店にしてみたらおもしろいのではないかというアイデアもあります。このように、広島にある財産を活かしていくこと、すなわち「ないモノ」を付け足すのではなく、「あるモノ」を活かすという発想が必要なのではないでしょうか。

「あるモノ」を活かす発想からの町作り

現在、広島市内の本通りからさらに南の宇品までアストラムラインを伸ばしていこうという案があります。そしてさらに、広域公園前からもう少し先に伸ばしていく3つのルートが考えられています。一つ目が広域公園前からトンネルを掘って己斐駅を抜け、平和大通りに出るという東京にある山手線のような環状線式ルート。二つ目は、五日市の石内というところを高架などで通ずるルートです。そして、その二つのちょうど真ん中にある田方に出るルートが三つ目になります。

以上の案で現在検討中ですが、どれも多額の費用を必要とします。確かに借金でまかなえば出来なくもない案はありますが、市民がらの反発は強いです。そこで、広島市内を走る路面電車が注目されるようになりました。

この間、広島電鉄から路面電車網の改善が提案されました。己斐駅から市内に入り、広島駅に向かう際、西区役所と十日市間でいくつもの屈曲部を通過しなければなりません。それを減らして、走行時間を短縮するために100メートル道路(平和大通り)を活用し、白神社までつなげていく案が考えられています。こちらだとアストラムライン整備と違い、特別に高架を作らなくてもよいし、電車自体は広島電鉄が持っているので、新たに線路を敷く費用ぐらいいしかかかりません。広電の案はまさに「あるモノ」を活かして町を作っていくという発想なのです。ただし、この案には交通処理や将来の交通体系からみて様々な問題があると言われており、これからどうするか検討されると思います。いずれにしてもこのようなことは行政だけで決められる問題ではありません。

これまで行政はついつい無理をし、いい格好をしてしまうことが多かった。それが今の国や地方の大赤字につながっている原因の一つでもあるのです。そのような意味では「今あるモノ」を使う、「ある資源」を活かす発想がこれからどんどん出てくると思います。また、そうしないと市民の皆さんが納得しない、許さない時代になっていくことでしょう。これからは昔のように、とにかく新しいモノ配ってくれる地方交付税や補助金、それに市の借金である市債ということになります。これでは少ないので地方の職員は

東京の霞ヶ関へ陳情に行くという慣例が、残念ながらまだ続いています。本当は、地方の側からこのようなことを止めていかなければいけないのですが。

将来を見据えた行政のあり方が問われていく

「景気」という言葉がありますが、景気の気というのは気持ちの気なのです。景気がいいと思えば景気は良く、景気が悪いと思えば気持ちもそうなるからみんなが沈んでしまうのです。

景気というのは基本的にお金が市場をどのくらい効果的に回るかということがポイントになります。そのためには景気の「気」にあたる「気持ち」をどれだけ前向きに持つかということが大事です。経済学者が、「個人消費をもっと起こさないと景気が本格的に回復しない」といいます。もう大きな橋を架けるなど、公共投資をするだけでは景気は回復しない。日本の銀行等には約1200兆円の個人資産があると言いますが、国民全員がお金を引き出して使い始めたら景気はすぐ回復します。しかし、「景気が悪いからお金を使わず持っていた方がいい」ということで財布の紐をしめていると、お金が世の中を回っていかないため、ますます景気が悪くなるという悪循環に陥ります。安い物を要るだけ買うことは、資源の面から見れば無駄なことにならなくて

良いのですが、生産面から見るとそれだけ需要が一定に限られてしまうので、景気のためにはなりません。ですからどちらが良いかは意見が分かれるところでしよう。

現在、広島市の財政が5年後に赤字で苦しんでいるようなことがないように、無駄な出費などを見直しているところです。それでも民間からは生温いと怒られています。

一旦染み着いた体質はなかなか治りません。今までのような借金をしながら大きな事業を進めるということは止めて、お金の有効な使い道を考えていこうと行政改革をしているのです。しかし、だからと言って行政までも財布の紐を締めてしまったら、世の中の景気ももっと悪くなるのではないかということも心配です。将来を考えると都市基盤施設など、取りかからなければ後になってやろうと思っても出来ないものもあるのです。だからこそ、そういう事業なのか、贅沢な事業なのかということを見極めること

が非常に大切なのです。

先日、ドーム球場を作るべきかどうか市民球場の入場者全員にアンケートをしました。作ったらよいのが48%、作らなくてもよいのが36%でした。どちらかが過半数を超えていたら決断できますが、どちらも50%を切っているので困っています。この事業を上手くやれば50年先まで使えるので、そのメリットも十分考えなければなりません。ドーム球場を作るのに500億円かかると言われています。これから高齢化社会になると、なかなか税金が入ってこなくなるので、今やっておくべきなのか、もしくはお金がないのでやらないのかという選択になります。ておくべきものは借金しながらもやるべきだと言われています。「あの時作ってくれていたなら良かったのに」と高齢化社会になってから言われても遅いのですから、それを上手く見極めて考えていかなければなりません。これからの行政は非常に難しい判断をせまられると思います。

ドーム球場構想

東広島駅跡地地区開発整備計画検討調整委員会が提言した構想。跡地を中心にドーム球場、シティーホテル、アミューズメント施設、駐車場などを整備するといった計画がなされている。しかし、公共事業の3割削減を目指す市にとって、400億円を越す建設費を確保するのは厳しいといった見方をする人が多く、ドーム教条の賛否はいまだに分かれています。

また、広島東洋カーブの本拠地にといった声もあるが、年間約6億円に上る球場しよう量のアップは球団側にとっても大きな障害となりうる。そして、なによりファンからの現球場を支持する声強いこともあり、無視できない。利用計画が決まらない段階で、跡地の所有者である国鉄清算事業団から処分期限ぎりぎりで購入した経緯を快く感じていない市民もいる。

「夢のある21世紀」を描いたこのプロジェクト、さらなる建設的な論議が必要とされるのではないだろうか。

質疑応答



質問

広島は、あまり若い人の力がうまく活かされていないように思いますが、市としては若者へのアプローチをどのように考えていますか？

講師

若い人が活性化すればいい都市というのではなく、例えば京都のように若者の町でありながら、全体的には落ちついているというのが理想です。大学（若者）というのは、都市を活性化するキーポイントになりうると思います。

質問

若者が生き生きとしている都市には大きな祭りがあります。広島にもフラワーフェスティバルがありますが、少し盛り上がり欠けるのではないのでしょうか？

講師

元々は広島カーブの優勝パレードからまった祭りですので、伝統的な側面はどうしようもありません。現時点ではこれ以外にももっと100m道路を活かしたイベントが出来ないか検討中です。

質問

広島を都市としてもっと伸ばすためには、長所・短所をつかむことが必要だと思うのですが？

講師

広島の高所……というよりも財産だと言えるのは瀬戸内海だと思います。あれだけ波のない海は世界中探してもありません。この点を使って何かできればなと思います。

質問

もっと広島から発信するものがあれば、若者が他県（東京・大阪等）に流れることはないのでは？

講師

広島は原爆都市ということで、知名度は世界的に高いです。しかしながら、それだけではなく広島は広島なりに、小さくても輝くような情報を発信できればと思います。

質問

原爆記念日の式典のコンセプトを教えてください。

講師

式典は、正式には「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」と言います。50年前から行っていますが、コンセプトはその時代その時代で多少異なると思います。しかし、「祈り」という意味あいを

持っているということは変わっていません。式典のアピールとして、インターネットも活用するようになりました。

質問

広島での平和の祈りが、どうも平和公園の中だけの祈りというように見えるのですが？

講師

365日平和を祈れ、というのも無理な話だと思います。8月6日を祈ることによって、364日を平和に暮らせるというのが理想だと思います。

質問

木を伐採した時、植林をすれば緑は回復しますが、川は一度埋めてしまうと、もうそこには水は流れなくなってしまいます。現在、自然を取り戻しながらの開発がどこかで企画されているのでしょうか？

講師

「開発と保全」は永遠の課題です。都市計画法で、市街化区域と市街化調整区域という2つの地域分けがなされています。

市街化区域は、どんどん開発できるもので、市街化調整区域は、自然を残すために開発を原則として禁止していますが、調整区域の住民の方からは「自分の土地が開発されることがないから売れない」などという声も実際にあります。そこを調整するのは、難しい課題だと思います。



質問

なぜ公務員になろうと思われたのですか。また、これから公務員になりたいという人に何か注文がありますか。

講師

これといった崇高な理念があったわけではありません。それと注文ですが、現場に居る立場から言わせてもらおうと、楽をするために公務員になろうというのであればやめた方がいいです。どこの職場にも言えることですが、そんな人にいい仕事を回すところはないと思います。

質問

企画調整課長という役で、何か苦労がありますか。

講師

今はかつてのようにお金が入ってきませんし、行政だけが頑張っても何も出来ないんです。市民と行政が一体になってやらないといけないと思います。市民の理解や協力をどうやってとりつけるか、いろんな意見をどうやってさばっていくか、そのあたりに苦労しています。

感想

池尻 利行

講師の濱本さんがすごく積極的な方だったこともあり、大変活気のある会だったと思う。講師の方が一方的に話すことなく、学生の意見をうまく引き出してくれたように感じた。それは、やはり普段されているお仕事が立場的に行政側の考えと、市民の意見とを両方採り入れながら、ベストな決定を下すという大変難しい判断を行っているからだろう。その為のまわりをよく見る力と冷静な考え方、中立的立場における必要な対応のやり方を短い時間の中でも感じることができた。そういったことができるようになるには、まず自分自身に対する自信と、相手を受け入れることのできる余裕が必要となるだろう。そして最後に決めたことを実行する力を持たなければ、市民の先頭に立ち、1つの都市をより良い方向へ導いていくことができないのだとつくづく実感させられた。

上重 十郎

広島の後々の事をよく考えて頂いて嬉しかった。僕達一般市民は、もっとこうして欲しいと思う事をどんどん提出し、検討してもらおうべきだ。濱本さんも市民の声はたくさん欲しいと思っていると思う。僕達が一番の問題と思うのが、今から社会へ出て行くのにこの景気の悪さだと思う。広島だけの問題ではないが何か対策を考えて欲しい。広島は何かまだ隠れている大きな力があると思う。それを濱本さん達を中心に僕達の力も添え、出して行ってもらいたい。

小倉 恵子

“広島”について色々と考えさせられた。政令指定都市としての広島。中四国地方の核としての役割を担う広島。原爆投下の地としての広島を限りある財源を活かしていく必要を痛切に感じた。

“あるものを活かして開発していく”広島には他の都市にはない個性を活かして、快適な都市空間を形成していくことが、これからの広島に課されたテーマなのだろう。戦後復興から高度成長を経てバブルの崩壊した現在、やみくもに無秩序な整備、開発をしてきたこれまでの振り返ることができるのではないだろうか。

工藤 耕輔

私達の住む広島は平和都市として世界的に有名だが、広島県民はどの程度自覚しているのだろうか。小学校の頃、被爆地として平和教育を受けてきた。しかし、現在ではそのほとんどを忘れてしまい、感性も薄れてきた。広島県を誇りに思っているとおっしゃる濱本さん。その理由は広島が世界的に知名度が高いからだとのこと。日本では一地方だとしても、世界から見れば東京に匹敵する。それは、原爆が最初に落とされた平和都市だからで、こんな広島を誇りに思っているのだと感じた。

河内 秀雄

市のこれからの行動、現状を知ること

ができ、良かったと思う。ポイントとして印象に残ったのは「600億のドームを作るとしてその100億の借金をするのはあなたたち市民なのです」という言葉でした。僕も広島市民だが自覚はなく、「え〜!? どういうこっちゃい!!!」と思ったが、そうですよね、我々の借金の上での建設ですから、でも僕のようなピンとこなかった市民は沢山いるのではないのでしょうか。

高橋 宏之

今回は、担当班ということもあり、少々忙しかったが、日頃行政の方のお話を聴く機会がないので非常に有意義な会だったと思う。正直行政に対して良いイメージを持っていなかったのだが、行政に携わる方のご苦労されておられるお話を聞いて少々考えが変わった。もっと市民の側が行政について知る必要があることを感じた。

田村 智宏

今回は実際に行政に関わる人の考えが聞ける貴重な機会だったと思う。広島経済の不振が長い間、変わりばえのないように思える平和活動への取り組みなど、市政に対し不安に感じることは色々あったのだが、それらに対する市側の考え、また迷いも率直に聞いたことは20年近く広島に住む私にとって大きな収穫であった。

橋口 千聖

講師の方も話せるところが限られているにも関わらず、かなり核心まで話してくださいました。そのお話を聞いて改めて視

野の広さは必要不可欠であると感じた。同じ日本人、しかも同じ広島市の中でこうなのだから、世界になれば大変な視野が必要だろう。

「机の上に立てば、それだけで視点は変わる。そんなものだ……」(映画『今を生きる』より)。

この域まで視点を高めるのは簡単ではない。しかし、気負わず、自分なりの「机の上」を早く見つけようと思う。

藤野 太郎

今回の学ぶ会は話を聞くまでは、退屈そうな内容だと思っていたが、話を聞いてみると全然そんなことなく、広島住民にとって必ずためになるし、社会の構造を知ることができた。こうしのかたのお仕事柄からなのか、自分達の意見も聞いてくださり、それに対するしっかりとした答えも返していただけたので嬉しかった。

三島 守登

「企画」 この言葉に対する興味はあったのだが、講演を終えて「しんどいな」と感じてしまった。このゼミの中だけでアンケートをとっても、多数の意見が出てくるのに、市民一人ひとりの声を聞いていたら、収集がつかないと思う。これをまとめつつ、行動に移すのは困難なことであるし、またその意見が通らなかったら、市民は不満をぶつけてくるだろう。そのような中で仕事をするのは大変であるが、また同時にやりがいもあると思う。今回の講演を聴いて、私もそのようにやりがいを見つけれたいと感じた。

6th

山下 江氏

『私の生き方～思想的遍歴を経て～』

確かに大学は自由です。しかし、自由と責任は表裏一体だと思えます。自由だから何をやってもいいのではなく、責任をもって自分で考え、行動しなければなりません。

大学ではいろんな経験を持った友や先生との出会い、知的で思想的な出会いがあります。人の意見を自分の中で考え、それが違えば自分の人生は自分で責任をとる。大学とは自分で考え、行動するスタイルを身につける場所だと思えます。

私の生き方

～ 思想的遍歴を経て～

『SAPIO 1998・4・8』 混沌とした世の中だ。21世紀を目の前にして、



厚生省、薬害の根源は汚職にあり

世界の社会情勢はその行方を見失いつつある。

日本もまた首を傾げたいくなるような出来事が相次いでいる。長引く不況による金融機関の倒産、官僚の汚職、絶えない青少年の犯罪……。何が正しく、何が間違っているのかさえ見えにくくなってしまったこの国で、例えようもない不快感だけが蠢いている。その巨大な恐怖に対抗しうる生き方とは一体何か。

折しもオウム心理教の問題でも注目を浴びた弁護士。その職に身を置く山下江氏は様々な経験を経て自身の価値観を構築していった。

「自分の頭の中で前提としていた考え方なり、仕組みなりが積み上がっていき、例えば高校の卒業ぐらいまでに一つの思想的なものになるとする。

しかし、そうやって積み上げていったものでさえ、大学に行って全部壊され、また新しいものになる。

またさらにそれを越えるということは何回も繰り返す。そういった感覚というのは、非常に面白いなと思います。

世の中が発展していく過程は、決して直線的ではない。沈んで、また乗り越えていき、違う新しいものが組み立てられていくことで世の中は進んでいるように思える。だから、日本が今後どうなっていくかは、今の段階では全く分からないと言ってよいのではないか。様々な価値観があって、考え方があって、仕組みがある。今の世の中に矛盾があるなら、そういうものを、既存の価値観にとらわれないよう、もっと自由な発想をもてば有意義な人生になるのではないかと語る山下氏。そのような生き方、思想を模索する山下氏の姿勢は大学時代にまで遡る。

Lecture

学生運動という体験

社会的なことに関心を持ち始めたのが高校2年生の頃で、大学生の時には学生運動の先頭に立っていました。単純で正義感が強かったので、運動にのめり込み易かったのでしょう。大学卒業後も活動を続けていました。

運動を通じて、例えばベトナム戦争で日本が出撃基地に利用されたり、水俣病などの公

害による矛盾が生じたりしている現実を見ると、世の中を根本から何とかしなければならぬと運動を通じて感じていました。もう25年前のことですし、運動の是非なんて、100年経たないと何とも言えないと思います。

学生運動には様々な傾向がありましたが、根本的には共産主義の思想が背景となっています。腐敗に満ちている世の中を根本から覆し、

理想的な社会を目指すのが共産主義の革命思想でした。それは資本家による労働者の搾取のない社会、いわゆる個人の自由と平等が保証された社会を指します。

なぜ学生が中心に立って運動が起こったのか。それは、大学生が世の中を再生する一過程だとみなされていたからだと思います。だから大学自体を解体し、より開かれたものに変えようということで、非常にラディカルな運動が行われたわけです。現在活躍している著名人の中にも、学生運動で暴れた経験を持っている方は結構いらっしゃいます。

*

学生運動は1918（大正7）年12月、東京帝国大学の学生によって結集された「東京新人会」に端を発している。社会主義、共産主義思想の浸透を背景に登場したこの会からいわゆる学生運動は様々な広がりを見せるようになった。

その学生運動も一時期の停滞を経て、1968～69（昭和43～44）年の全共闘による大学闘争で再び高揚期を迎える。ベトナム戦争への加担や、学費の慢性的値上げの一方で行われていたマス・プロ教育、教育現場における管理強化などの学生を取り巻く状況が運動を激化させた。その典型として登録医、インターン制など医学部教育体制の改革要求に端を発した東大闘争や、20億円の用途不明金問題に対する告発により火がついた日大闘争などが挙げられる。ピーク時には約8割にあたる165校が紛争状態に入り、その半数の70校でバリケード封鎖が行われたといわれている。

学生運動をしていた頃のことについて、山下氏は「今思えば理想が高かった」と振り返る。

「高度経済成長に関わる公害の矛盾、また貧富の矛盾とがあって、そのような社会情勢の中での大学というのは一体なんなのか。自分たちは世の中で



山下 江（やました・こう）氏

昭和27年4月11日生。大柿町出身。昭和46年修道高校卒業。同年、東京大学（工学部）へ。平成5年4月から弁護士になられ、平成7年7月に山下江法律事務所開設。

のような役目を果たさなければならぬのか……。様々な問題を突きつけられたという感じがしていました。その当時、今と比べて矛盾は多かったですし、何も日本だけに限ったことではありませんでした。米国ではベトナム反戦運動が起るなど、世界全体が反体制的な流れだったと言えます」。

父親から学んだこと

私の父親は若い頃に、戦後革命運動経験を持っています。そんな父親から多分に思想的影響を受けてきました。その中でも一番印象に残っているのが「全てを疑え」という言葉です。思想家のマルクスが好きだった言葉でもあります。これは今の世の中でも通用するのではないのでしょうか。

例えば、何か現象が起きるとする。その現状を「ああ、そうか」と流すのではなく、「何故かな」と一旦は考えてみる。あるいは「こ

れでいいのかな」などと考える。そうやって、「全てを疑った」ときに初めて学問的な進歩とか世の中の進歩とかがあるのではないか。別に全てを懐疑的に見ようと言っているのではありません。「全てを疑う」、そこからいろんな事が始まるのではないかということなのです。物事には様々な側面があり、変化する。一面にとらわれない自由な発想や考え方を父親から学びました。



インドネシアの学生運動がスハルト政権を揺るがした

そんな父親から受けた影響もあり、運動に深入りするようになりました。学生運動の中では今生きていること自体が奇跡的と言っていいくらいの修羅場を経験しました。大学から何かを教えてもらうのではなく、自らが考える機会、刺激を与えてもらったと思います。

*

「あまり詳しくは言えませんが」としながらも、父親の影響を多分に受けたと山下氏は振り返る。大学4年生の就職活動期になって止める人がほとんどの学生運動をその後も続けていった背景には、父親から植え付けられた正義感があった。それは、ある現状に対して、「これでいいのか」と絶えず自問することが進歩に繋がるという山下氏の思想に深く関係している。

しかし、その姿勢を保つことは決して容易なことではない。物事には様々な側面があり、そして常に変化し続けている。大学生生活だけでなく、その後も様々な経験を経た山下氏がこのような考え方に行き着くまでにはそれなりの苦しみがあったようだ。

プラス思考

私は2年半ぐらい前に離婚を経験しています。

学生運動で出会ってから20年くらい連れ添っていた人との別れです。それまで私はマルクス主義という宗教とは無縁の世界で生きていました。しかし、離婚して非常に苦しかった私を救ってくれたのが親鸞だったのです。

離婚直後、宗教絡みの本を10冊ぐらい読みました。そして、親鸞の『歎異抄』に出会ったのです。『歎異抄』の中には「善人ですら救われるのにどうして悪人が救われないことがあるか」という意味の文章があります。非常に逆説的な文章なのですが、罪の意識を持っていた自分には随分と励みになりました。心の苦しみを洗うということにおいて、宗教はそれなりに必要なのだとその時感じたのです。

人生をどう生きるかということを考えていく上で、プラス思考は大切だと思います。

物事には決まって、プラス面とマイナス面がある。その両面をどう見るかによって、その後の人生は全然違ってくるのではないのでしょうか。私の離婚についても、辛いことではありますが、見方を変えれば新しい出会いの始まりでもあります。また新しい恋ができると思えば人生は明るい方へ向かっていく。確かに、なかなかそのようには考えられないものです。しかし、できるだけ自分にとってよいことだと思う癖を習慣にすれば、プラス思考は身に付くのではないかと思います。

*

仏教には「自力」と「他力」の二つの流れがある。しかし、山下氏はこの二つを根本的には同じであると言う。

「他力」は「昨日のことや明日のことをくよくよ悩まず、ただ全てを仏に任せればいい」という考え方である。一方自力の方は「今ここでしていること、今を生きることが重要である」という考え方である。山下氏は、この二つについて、「他力」は否定的表現をもって、「自力」は肯定的表現をもって主張しているが、両者とも過去や未来を考えずに今を大切にすることにおいて同じであるという見方をしている。山下氏のこの様な視点からも、物事を多面的に見るといふ姿勢がうかがえる。

私の生き方

私のモットーは「自分にとって都合なことが生じても、常に感謝の気持ちで臨む」ということです。例えば、自分にとって非常に嫌なことが起こったとします。しかし、考え方を変えれば、それは自分を鍛えるということでもあるのです。苦しみを乗り越えて、

もっと強くなるというのが私の生き方の指針です。その根本にプラス発想があるのだと思います。

プラス発想は多面的な見方にも繋がっています。私は弁護士ですから、例えば正義について考えてみましょう。そこでおもしろい小話を紹介します。まず、キリストは正義を「愛」であると言いました。次にマルクスは「物」であると言いました。つまり、世の中を動かすのは経済力や経済体制であり、その物質的な成長が人間を栄えさせているということです。精神分析学者のフロイトは、性的な衝動が世の中の成功を生むということで、正義は「セックス」であるとしています。そして、最後に、アインシュタインが登場し、正義は「相対的」と言いました。

私はいろいろな正義があると思っています。依頼者には依頼者の正義がある。相手方には相手方の正義がある。それを法律的にどう調整するかというのが裁判であるわけです。私にとっての正義というのは、相対的正義を認めることではないかと思っています。「それをけしからん、認めない」という人もいるでしょう。しかし、相対的正義は、その人たちをも認めるということなのです。

(平成9年11月25日 講演)

Interview

学生運動に参加されたということですが、あの時の精神が現代にどのような形で影響を与えていると思われますか。

山下：人によってもその信念とか、レベルに違いはありました。例えば、学費を上げる大学に大勢の人が反対デモを起こしたとしても、その全員が世の中を根底から変えようとしていたわけではありません。

私自身は根本から世の中を変えたいという側の人間でした。そのような人たちが、共産党よりも過激である新左翼というグループを形成して、いわゆるノンポリ学生も組織していました。そのような運動は確かにラディカ

ルでした。実際、ベトナム戦争に日本が巻き込まれていくような流れはくい止めたと言えます。その他、福祉の充実とか、男女の雇用均等とか、新たな流れが生まれた。今の大手企業や官僚やマスコミなどの中堅は、学生運動で中心になって活躍した連中なんです。いろんな意味で無駄ではなかったと思います。かなりラディカルではありましたが。

経済体制によって人の暮らし方が決まる。今の世の中が経済体制が資本主義という人が人を搾取する社会であるから、資本主義社会を変えようとしていた。資本主義が正しいのかどうなのか最終的にはわかりません。

おもしろい話があって、ロシア人が共産主義だった時に日本に来て、日本はもう共産主義になっていると言ったという。多く稼いだ人は、多く税金を払っています。資本家が労働者を搾取するという単純な構造ではない。時代は変わる。「何のために」という目的があつての思想だと思えます。統計によると日本では、自分を中流以上と考える人の割合が、7～8割もいる。このような現状にあつて、資本主義が即「悪」とは必ずしも言えないのではないかと。変革すべき点も多いとは思いますが。

大学では自分で学びたいことを学べるという自由があります。しかし、その中で、何をすればよいのか分からなくなる部分もあると思います。山下さんにとって大学とは何ですか。

山下：確かに大学は自由です。しかし、自由と責任は表裏一体だと思えます。自由だから何をやってもいいのではなく、責任をもって自分で考え、行動しなければなりません。

大学ではいろんな経験を持った友や先生との出会い、知的な思想的な出会いがあります。人の意見を自分の中で考え、それが違えば自分の人生は自分で責任をとる。大学とは自分で考え、行動するスタイルを身につける場所だと思えます。

山下さんの「スタイル」と言えばプラス志向ということになると思いますが、そのことに関して、今までの経験を教えてください。

山下：最近、相手方が、依頼者の借金を私自身に払えと迫ってきました。拒否するとイヤガラセ電話電話で再三してくる。仕事上のトラブルとはいえ、そのようなことが延々と数カ月も続くと、やっぱり法律事務所としては頭が痛い。けれど、そんな業務妨害も繰り返されると、私の秘書が対応慣れしたり、事務所全体で闘おうという連帯感が生まれたりします。単なる嫌がらせが事務所の潤滑油にさえなる。そのようにとらえると、嫌がらせの電話があつても非常に楽しいものとなる。これもプラス志向と言えるのではないのでしょうか。ちなみに、嫌がらせの電話などは全て録音し、証拠として残しています。



Impression

阿部 直文

講演の中で「全てを疑え」という山下さんのお話が心に残ったのは、非常にインパクトのあった具体的な話のせいだったからだろうか。「全てを疑え」という話は物事を疑ってかかることによって一面的な考え方から多面的な考え方ができるようになり、自分に新しい発見ができるようになると自分なり

に考え、理解することができた。また、講演を通じて、私は残りの学生生活の中で学生時代にしか得られないものと、学生時代に得るべきものを発見し、そして自分のものにしたと考えた。そのためには今までの自分に不足していた多面的な見方も必要と考えた。まずは自分なりに努力していきたい。

池尻 利行

学生運動などの大きな目標から、些細な日常生活まで、何事にも積極的に取り組んでこられた過去があるからこそ、現在の幅広い人格が形成されているのだという事が伝わってきた。そして、弁護士という難しい職業をこなしていく上で最も必要とされる、それぞれに存在する正義に対する理解、相対的な考え方、個人個人の価値観について考えさせられた。それからの集約として、自分の立場だけで物事を考えず、「まずは全てを疑う（自分を含めて）」という考え、接し方が生まれるのだろう。その結果、すべての情報を得て、理解した上で、最終的に自らを確立していくべきであるという事を学んだ。

石川 直子

人生の教訓というか「こう考えたら楽だよ」といった感じのヒントをいっぱいもらった気がします。人生経験やもっておられる知識の多さに、やっぱり「すごい人だな」と思いました。「教養のある人程、分かり易い言葉を使っていわんとしていることを伝えられる」という言葉を思い出したのですが、人の前で話をする、自己を表現する、そう言ったことを私はもっともっと学ばなくてはいけないなと、山下さんの講演を聞いていて、思わず自分に確認をしました。山下さんの人柄に、とても惹かれた会でした。

上重 十郎

過去の失敗にくよくよせず、プラスに考えるという言葉に感動した。今まで様々な失敗があるし、これからたくさんあるだろう。しかし、それらすべてに意味があるとは思えず、プラス思考へと考えていくことはなかなかできなかった。まだ若いし、これからは失敗を恐れず、いろんな事に挑戦し、視野の広い人間になっていきたいと思った。

吉川 真琴

確かに大学では、いろんな場面で刺激を与えてもらえる。だけどそこから自分がどう行

動するのが一番大切なことだと思った。自分で考えて行動する。これができてはじめて刺激が活かされるのだと思う。

また、講演の中で「すべてを疑え」というお話があった。自分のことをこれで良いのかと思えないと進歩はない。私も高校の部活動を通して、その時その時の結果が良かったとしても絶対に自分に満足してはいけないといいきかせてやっていた。そういう思いを持って部活をしていた高校時代と大学に入ってから自分を比べてみると考え方一つで自分のやっていることがどう結果に出るのがよく分かります。今回のお話を聞いてもっと自分を見つめ直さなければいけないと思いました。自分の中で活かしていきたいと思います。

谷本 美紀

「陸上を続けていて何か意味があるのだろうか？」最近そんな事を考えていた。続けていてもあまり成長が見られないのならやめても一緒ではないかなと。大学に入った事も時々後悔をしていた。だけど、今の自分は様々な選択肢の中から悩み苦しんで、自分で“これだ”と思ったからここに存在している。「自分が生きてきたことを全てプラスに考える方が得である」。山下さんがそうおっしゃった時、答えが見つかった気がした。間違いではない、意味もある。プラス志向がどれだけ大切か、陸上を身を持って感じた。400メートルという種目は気持ちがとても大切で、プラスに考えるかどうかで、レース内容や記録は良くも悪くもなる。自分に負けたら達成感決して得られない。自分と常に勝負である。残念なことに精神的に弱い私は、その勝負に負ける事が多い。大学に入り、様々な刺激を受けた。その度に立ち止まったり、後悔したり、成長したり、価値観が崩れたり。経験が良くも悪くも人を成長させる。これから先、様々な壁にぶつかっていくと思う。破ることが出来たり、光が差さなかったりするかもしれない。今回の学友会はそんな道を突き進む私に少し勇気を少し与えてくれた。

7th

佐伯 寛氏

『白髪が増える話』

私は性格上、人を騙すということがへたくそで、嘘はすぐにはばれてしまうのです。

私は人と話をする、人と付き合うという上で大切なのは「正直さ」だと思っています。でも、そればかりだと痛いところをつかれてしまうので、電話の時は平然と嘘を言います。人の顔が見えなかったら嘘がつける。誰でも一緒だと思いますが、顔が見えないから大きな事が言えるのだと思います。

でも、人と会ったときには正直に話します。相手を目の前にして嘘をついてら、結局は分かってしまうものなのです。しかし、どうしても仕事上、嘘をつかなければならない時があります。それを許してくれるかどうかは、日頃からの人間関係によるところが大きい。なるべく普段の時は嘘をつかずに正直に対応すること。これが一番必要なのだと思うのです。

第7回 学ぶ会報告書

1997年12月18日(木)

演 題 白髪が増える話



講 師

(株)サンフレッチェ広島 広報部
Jリーグ 広報委員

佐 伯 寛 さん

【講師プロフィール】

- 1987年 中国電力株式会社 入社(広島営業所勤務)
広島大学 入学(経済学部 第二部経済学科)
- 1992年 広島大学 卒業
矢野サービスセンターへ転勤
- 1996年 広島北営業所へ転勤
- 1997年 サンフレッチェ広島へ出向

いまから就職してゆく皆さんへ

学生時代のつきあいというのは、クラブやサークル、学校、アルバイト先など、比較的同年代の中での閉鎖的なつきあいではなかったと思います。私の場合は、高校を卒業して突然社会に投げられました。社会ではいろいろなお客様（取引先）と対することになります。

私が以前まで勤めていた中国電力は独占企業ですので、中国地方に住んでおられる全ての方のお相手をしなければなりません。電気というのは生活の必需品であり、これが無いということなど考えられない。そのため、料金滞納のため電気を止めた際、また停電のためやむを得ず電気を配送できなかった場合、お客様からのお叱りを受けることもあります。あと、電気料金が高いという苦情を受けることもありました。

中国電力にいた10年間、このようなやりとりをお客様としていきました。言い方が悪いかもしれませんが、クレームに対応するコツは“どうやってお客様を丸めこむか？”なのです。

お客様を説得するにはどういう方法があるのか。それには二つあると思います。まず、理論的に、理路整然と並びたてて説明していく方法。もう一つが人情に訴える方法です。大事なことは、この2つをどう使うかということ。私が実際お客様と接する時、まず二、三言交わしてどちらの方法でいくかを考えます。

ただし、例外もあります。台風19号が広島に大被害をもたらした年がありました。その時、私は広報車に乗ってお詫びをしに走り回っていました。車の周りをお客様に取り囲まれて怒られました。怒られても電気は送れないわけです。理論的に説明しても、情に訴えても通用しないこともあります。

やはり肝心なのは「言ってもどうしようもないことだ」と分かっているお客様を追い詰めないことです。相手もピンチに陥ると反発してきます。それを避けるため、相手方に逃げ道を用意しておくわけです。

以前、夜中2時に酔って理論的な話ができそうもないお客様から呼び出され、監禁状態にされたことがありました。危険な交渉になりそうな場合、いざという時を考えて二人一組で行くものなので、

あの日は私が家に入ったのですが、何と2時間も正座させられて、怒鳴られ放題。あとで上司が助けに来てくれて、何とか收拾をつけることができました。普通の商社なら、都合の悪いお客様とは二度と取引をしなければいい。しかし、中国電力のような独占企業だとそういうわけにはいかないわけです。

皆さんも、夢や理想があると思いますが、思ったとおりの仕事はさせてもらえないものです。私も中国電力に入って、まさかこんな仕事をする事になるとは思ってもいませんでした。そういうことを頭に置いて、就職する会社を選んでいただきたいなと思います。

白髪が増える話

中国電力はサンフレッチェの出資会社だった関係で、出向社員が一人ほど球団へ送られることになっています。私は小学時代からサッカーを続けていて、中国電力にいたころはサッカーの審判もしていました。

中国電力の人事部長はサッカー部の部長もしていたのですが、ある年の忘年会の席上で、その部長に酒を注ぎながら「サンフレッチェに行くことはないんですかね」なんて酒が入った勢いで言ったわけです。その発言が効いたのかどうか分かりませんが、次の年にはサンフレッチェに出向となってしまいました（笑）。よく日本では“飲ミネーション”と言って、酒の席で相手とのコミュニケーションを図るようですが。あの日の私は失敗だと思いましたね。今はちょっと後悔しています。

私がサンフレッチェに出向した当時はJリーグが社会現象になるほどフィーバーしていたので、ある程度いいイメージを持っていました。また、広報という仕事がどんなものか分からず、会社の決定事項をマスコミなどに発表するだけでよいというぐらいの認識しかなかったのです。しかし、それはとんでもない誤解でした。

最近、サンフレッチェ広島は全国版で新聞紙面を賑わせて(?)いますが、いろいろな方面からつきあげられ、ストレスがたまりまます。ストレスだけが残ります。そうなると、白髪が増えるわけです(注1)。

信頼関係を築くということ

中国電力にいた頃にも「Y県S市の社員は2、3年で髪が真っ白になる」という類の噂などありました。そんなことを聞く度に「自分は絶対行きたくないな」などよく思っていたものです。それが今や、……自分も例外ではない状態です（笑）。

ストレスというものは何とか解消しなければなりません。

実は昨日、選手と会社側とによる交渉が行われたのですが、94年の優勝以来ではないかと思われるほどのマスコミが、この交渉を取材しにきました。マスコミは食いついたら絶対に離しません。その時の様子を報じた映像の端に私もチラッと写っていたのですが、死にそうな顔をしていたと思います。マスコミとしては当然、社長のコメントが欲しいところなのでしょうが、私としては社長を守らなければいけないわけです。とにかくマスコミを下がらせるのに必死です。周りを囲むマスコミ関係者の肘が（故意にはないのですが）飛んできて、頭に直撃したりと、ストレスだけではなく体の痛みも伴ってすごく疲れてしまいました。このように、仕事をしているといろんな人との接衝があるわけです。

私もサンフレッチェに来た当初は右も左も分からない状態でした。選手にしても他人である私に警戒心を持っていたはずです。そこでどうやって選手たちと仲良くなるか、相手の心に入り込むかを考えました。

サッカーの素人で、運動も得意でなかった前任者は、無謀にもパス回しをしている選手たちの輪の中に飛び込んでいったそうです。ボールも取れずにクタクタになって、選手たちに笑われたものだと言っていました。でも、そのことで何とか選手たちに受け入れてもらったのです。私は前任者と同じことをやっても仕方ないと思って、正攻法で行きました。選手が紅白（練習）試合をする際、審判をやったのです。

選手側にしてみたら私は「フロント」側の人間ということになります。選手側を「現場」と言います。違う立場を分かつようと思えば、そこにいる人と同じことをする、要は同類と認めてもらえばいいわけです。

もう一つ大切なのは、相手を大切にすること。選手も人間

ですからスランプに陥ることもあります。そういう時は人と会いたくないことだってあるはずです。選手が苦しんでいるということを察して、マスコミの取材が入っても、「断っておくね」と声を掛ける。そしてもう一言、「復調したら、優先的にその取材に応じてあげてください」とつけ加える。このように選手を守ってあげる、大切にすると、そういうことから理解し合って、いい人間関係が築き上げられていく。私はそのようなプロセスを大切にしています。けれど、互いの距離が近くなればなるほど、こきつかわれるようになります（笑）。いい関係を保ちつつ、自分の本来の仕事をスムーズに進めるためにも、これでいいのだと思っていますが……、土曜日も日曜日もあったものではありません（注2）。

例えば、日曜の朝などに、選手から電話が掛かってくることもありますし、今日は早く帰って寝たいと思ってマスコミから取材の依頼があれば対応しなければなりません。取材対象の選手を探し始める。なかなか捕まらず、方々に電話を掛けまくっている間にもマスコミから再三催促を受ける。そんなこんなで結局（マスコミの都合で設定されている）最終期限の9時まで、仕事をしなければならぬわけです。時には11、12時まで仕事がズレ込むこともあります。年中無休です。ストレスもたまります。そうするとますます白髪も増えるわけです。

人と話をするときのコツ！

それでは「人に上手く話をする」ときのポイントをいくつか挙げてみます。

まず、人の気持ちを考えながら話をするということ。

こちらから一方的に言わず、まず相手の言いたいことを言わせてあげます。話を聞いてもらおうと相手は納得します。そのあとで、こちらの言わなければならないことを、相手にトーンを合わせながら伝えるんです。

そして、相手と視線を合わせる、つまり目を見て話をする事。

心理学の見解からも言われていますが、子どもと接する時には視線を低くして話をする事で、納得し合えるようになるそうです。

ですから私も、控え室で座っている選手に対しても、同じように自分もしゃがんで、視線を合わせてから話をします。

1対1で話をするときなど、目を合わせていると落ち着きますから、交渉をするときなどは特に、視線を外さない。下を向いたりしていると不信感を持たれてしまいます。

社会に出て行かれた際にはその辺りを気をつけてみてください。

最後に

社会に出るとストレスも大変たまります。精神的に疲れると、よい仕事もできません。

ストレス解消と言っても人それぞれです。私も特効薬というほどのものを持ち合わせていませんが、やはりサッカーが好きなのでボールを追っかけたり、体を動かすことによってほんのひとつきでもストレスを忘れるようにしています。みなさんそれぞれ趣味があると思いますので、その趣味を楽しんでいる瞬間だけでもつらいことを忘れていけばよいのではないのでしょうか。

趣味などを持って、ストレスを上手く発散しながら、仕事に勉強にがんばってください。

(注1)

この当時、サンフレッチェ広島は、高木琢也選手や森保一選手らを、他のチームに放出するかしないかの決断を迫られていました。結局、数週間のちには、放出が決定されました。

(注2)

佐伯さん、せっかくのおやすみの日。

朝早くから電話のベルが鳴り響き、受話器を上げてみると、選手の声。

「東京の新幹線、飛行機は、何時のがあったかいね？」

——本当は時刻表を調べれば、すぐ分かるはずのことなのですが……。

受話器を置いたあと、必死に時刻表をめくる佐伯さんの姿が……。

質疑応答

伊妻

私の友達に熱烈なサポーターがいます。その人がよく、「無料のチケット」をもらって試合を観に行っているようなのですが、それで採算がとれるのでしょうか。

佐伯さん

プロの球団というのは、本来お客様から入場料をいただいて経営していくものなのです。けれど残念ながら、あまりにもスタンドが寂しすぎるとというのが現状です。

今年の平均入場者数は6千8百人だったのですが、例えば広島スタジアムという器でこれだけ入れれば、結構うまったなという感じがしますが、ピクアーチだとまさに閑古鳥が泣いているような状況なのです。

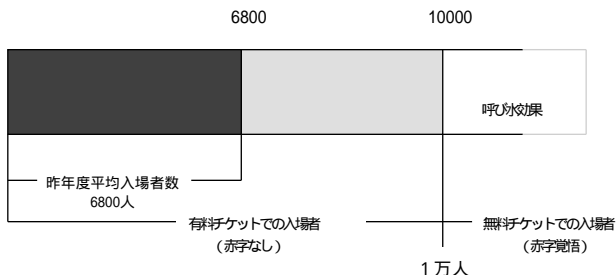
ではどうするかと言うと、お客様を呼ぶために、まず一度試合を見てもらって、「なかなか面白いものなんだな」、「次も見に来ようかな」といった呼び水的なこともしていくのです。その一つとして「無料チケット」というのが出回っているのは事実です。

そこで「無料チケット」で商売が成り立つのかということですが、例えもお金を払って見に来て下さる方が1万人だとトントンで赤字はありません。お客様がスタンドを埋めているということは、そこにいるお客様とかテレビを見ている人に対して一つのアピールになる。そして、無料で来られたお客様がサッカーの面白さを感じ、また観に来てみようと思われれば、それも一つ。「無料チケット」でお客様を集めることでそういった何らかの形の効果がでてくる。確かに「無料チケット」分の収入はないけれど、次回はそれを越えるプラスが期待できるんです（図参照）。

同じようなことは、航空業界でもよくあります。飛行機にはエコノミークラス、ビジネスクラス、ファーストクラスの3種類に分けられていて、料金がそれぞれ違う。エコノミーにはお客がいっぱい入るのに、その他の料金が高いクラスにお客が入らなという航空会社はわざとエコノミーの空席数以上の航空券を販売することがあります。そして、溢れたお客をビジネスクラスに座らせるのです。こ

参照図

サンフレッチェ入場者数



れを、オーバープッキングといいます。

エコノミーの料金でビジネスクラスに座らせるということは一見損をしているようにも見えます。ですが元々ビジネスクラスは空席だったわけですから、料金は半額になりますが、収入になります。また、お客様の中で「もしかしたら、またエコノミー料金でビジネスに乗れるかもしれない。もう一度この飛行機を利用してみよう」という消費者心理が働き、結局のところ航空会社側は儲かるというしくみです。サンフレッチェの場合、このように上手くはいってないです。そんなに現状はあまくないものなのです。

森田

最近、サンフレッチェの経営が苦しいというお話をよく耳にします。今後どのような経営戦略をお考えでしょうか。

佐伯さん

今、実際に新聞などでサンフレッチェの「長期ビジョン」が問われています。そこで、これからどうしていくかということなのですが、最終的にサンフレッチェにいる選手の顔がどれだけのの人に知られているかという話になると思うのです。

日本代表を経験した高木選手、柳本選手、路木選手、森保選手、前川選手クラスは知られていると思いますが、恐らく他は知られて

いないと思います。では、プロ野球、広島カーブの選手はというと試合中継も多いですし、ある程度顔が知られてると思います。まずそこから違います。ですから、とりあえず選手をもっと知ってもらって、多くの方に親しみを感じてもらう、ここが一つのポイントです。知っている選手がいれば試合を観にスタンドへ足を運んで下さるようになると思います。ですからもっと選手を身近に感じてもらう、「同じ広島のもんじゃけえ、応援しちゃう」という世界を作らなければいけないのではないかと思います。その為に(広報の私の担当ですけど)、サイン会とか、土曜日に試合が広島で行われる場合などはサッカー教室を開いたり、様々な形で選手とふれあえる機会を作っています。また、それだけでなく選手をもっとテレビやラジオに出したり、新聞で取り上げてもらったり、マスコミを使って選手の認知度を向上させていくということも必要だと思っていますので、このような活動も始めたいと計画しています。

チームを維持する為には多額のお金が必要なので、安定的な収入を得ていくということも大切です。収益にはお客様から直接頂く入場料と、スポンサー料、そして放映権料があります。放映権料は試合をテレビ中継するという局から得るもので、スポンサー料とはスタジアムの周りに看板を設置することを条件にいただくお金のことです。そうやって集めたお金は選手の補強などに使われています。まず第一にスポンサーを獲得することが必要なので、今も一生懸命営業に回っています。

サンフレッチェ広島の選手は残念ながらほとんどが無名です。しかし、そのような選手にさえも年俵は支払わなければいけない。かと言って、有名どころの選手を他チームから引っ張ろうと思っても何億というお金がかかります。鹿島アントラーズはブラジル代表の超一流プレイヤーを10数億で獲得しようとする。これが本当の意味での強化策なのです。

すごい選手が来る。その選手を観にお客様が集まる。その選手が良いプレーをして、鹿島が優勝する。優勝すれば賞金が入る。これが普通のサイクルだと思うのですが、残念なことにサンフレッチェはその前段階で、まずは地道にお客様に愛してもらい、支援してもらうための営業活動を行わなければならないのです。

石川直子

私は、今回高木選手を引き抜こうとしているヴェルディー川崎(すごく弱いんですけど)とかジャイアンツが大嫌いなんですけど、佐伯さんはJリーグの中でどのチームが一番お嫌いでしょうか。

佐伯さん

やはりお金を持っているヴェルディー川崎は嫌いです。サンフレッチェは10億円でモタモタしているのに、川崎は一年で20億円赤字出しても平然としているから本当に頭にきます。

実際にベルディーにもいい選手が多い。しかし、更に補強してもっと強く、人気のあるチーム作りを考えられていらっしやるようです。その上で高木選手はどうしても外せないというのがヴェルディー側の考えだったのです。金に糸目をつけないやり方で動いていたヴェルディーの監督が解任されたようなので、これからどうなるか分かりませんが、とにかくそれだけ高木選手は高い評価を受けているわけです。私には権限はありませんが、強化担当にがんばってもらって、広島に残って欲しいという気持ちは強いです。そして広島の高木選手が、「アジアの大砲」から「世界の大砲」へと変わってくれば最高だと思っています。

池尻

プロサッカーのクラブチームが成立するためには、サポーターがいないことには話になりません。その点で言えば広島の場合、すこし盛り上がり欠けてるのが実状だと思うのです。

ヨーロッパあるいは南米などでは、サポーターが一番底辺となってクラブを支えている。しかも若い年齢よりは中年層の40、50代のサポーターの力が大きな支えとなっているように私は感じます。日本でも鹿島とか浦和が実際そのような感じで、親が子を連れて応援に行く土壤がある。プロ野球の広島カープも中年層がすごく支えになっているところからも、高年齢層がスポーツを支える一つのポイントだと言えます。以前までサッカー所と言われた広島が鹿島や浦和となぜこのように差がでてしまうのかということについて、どのようにお考えでしょうか。

佐伯さん

プロ野球には五十年単位の歴史があり、子供の頃、野球好きだった方々が、大人になって自分の子供とともに応援するようになったことは自然な動きだと思うのです。

サッカーの場合は、プロとして成立してから5年目なので、プロ野球のようにある程度年齢が高い方が応援していただけるまでには、もうちょっと時間がかかるのではないのでしょうか。

プロ化された影響で中、高年世代のサッカー人口は急増しました。しかし、その子たちは子供がプレーするのが精一杯で試合を観に来るといふ余裕はないと思います。その子たちが大人になって、子供と一緒に見に来れるぐらいには20年単位の時間が必要だと考えられています。そしてはじめて定着したと言えるのではないのでしょうか。

確かに鹿島と浦和は高い年齢層の方が中心となって支えています。なのにかつては「サッカー所」「御三家のひとつ」であった広島が鹿島と浦和よりも応援の熱が低いのか。結局は「地域性」なのです。広島で言えば、かつてその頃東洋工業でプレーされていた方々はゴール側で応援するのではなくて、バックスタンドで愚痴を言ってる。その土地、その人の楽しみ方というのが「地域性」に表れるのではないのでしょうか。だから、このことはまだ時間のかかることだと思っています。

私は昨年ドイツに行って超人気がある「バレンミューヘン」というチームの試合を観戦しました。若い方、年配の方が一緒になって応援し、すごく盛り上がっているなという印象を受けました。何故こうやって応援できるのかと考えてしまいました。ここで注目すべきは、アウェー（遠征してきた）チームのサポーターが大挙して押し寄せて来るということ。日本で言えば広島と東北ぐらい離れている所から、何千人という人が駆けつけて来るわけです。この根本には「オラが町のチーム」という高い意識があるようなのです。加えて、昔の都市国家の名残なのか結束が固い。残念ながら日本とは規模が違います。そういう意味でも熱烈的なサポーターがいないのかなと思います。

感想

阿部 直文

講演で佐伯さんの仕事における苦勞が分かった。心に残ったのは佐伯さんがサンフレッチェの選手達とサッカーをすることで顔と名前を覚えてもらったというお話だ。

人の心に入り込むこと、つまり、人と親しくなることは学生生活はもちろんのこと、社会に出てからはもっと大切になってくるだろうと感じた。私自身、人の心に入り込める人間になりたいし、そのための努力をしたいと思う。

佐伯さんは仕事で大変苦勞なさっているにも関わらず、反面大変充実した日々を送っていらっしゃるのだと感じた。私も苦勞はあっても充実した仕事に就きたいと思う。

石井 瑞穂

「白髪が増える話」を聞いて社会の厳しさを少し学んだような気がした。でもその反面、好きなこと、やりがいのあることをやられていて、うらやましい気もした。本当に自分の好きなことだったら苦勞しても満足できるのだな。私もそんな仕事に是非就きたい。

それから、「上手に話をするコツ」を教えてくださいましたが、しゃべるのがあまり上手でない私にとって、非常に勉強になった。

梅田 真理子

サッカーの事に関してもそうだが、このところ日本という国自体に忍耐とか根気とかいわれるものがなくなってしまった様に感じる。即効性のある事、ある人、即売れるもの、そういうものばかり取りざたされる。サンフレッチェ離れもその中の一つのように思う。

今だけを見て、今の判断で全てを判断する。それは正しいようで正しくない側面も持ち合わせている。長い目で物事を見る事も大切であるように思う。

橋口 千聖

今回はJリーグに携わる、一企業戦士である講師の話をおもしろおかしく聞かせてもらった。しかし、その内容は学生である自分にはまだ実感できないものである。同時に、社会の深さの一端を見せられた感じもして、空恐ろしいような、何とも言えないものが残った。

一度社会に出ると、今度は社会からはみ出すのが恐ろしくなるといふ。何にしても、半端な気持ちではつとまらないようだ。

堀川 竜太

佐伯さんは本当に大変な仕事をされているのだなと思いました。常に会社、選手、マスコミ、サポーターの注文を受ける窓口のような立場にあり、土、日曜もないと言われていた時の顔からは苦勞がうかがえました。中電からサンフレッチェへ出向となったきっかけは酒の席で人事部長にふともらした言葉から。少し後悔していながらも、今の仕事にやりがいもあると言われていたのが立派だなと思います。人付き合いのアドバイスは、これから社会に出た時、非常に役に立つもので参考になりました。

本川 晶子

中電時代の辛そうな営業のことも、笑顔でおもしろおかしく話されている佐伯さんを見て、なんてすごい人なんだろうと思いました。サンフレッチェという組織においても、会社とマスコミに挟まれて仕事をなさっている佐伯さん。大変なこともある中で仕事に生き甲斐を持っていらっしゃるということが話されていることから伝わってきて、とてもうらやましく、私もそんな仕事を見たいと感じました。

また、相手に自分を受け入れてもらうためにはどうすればよいかということを経験に基づいて話して下さった時、自分にも似たような経験があったので共感できました。相手に自分の言いたいことを納得させるために逃げ道をつくってあげるといふ話がありましたが、私はいつも相手を逃げ道がなくなるほど追い詰めて失敗するので、そういうテクニックがあれば少しは要領よく世の中を渡っていけるのではないかと考えています。

サンフレッチェ広島 そのときとその後

佐伯さんを講師にお招きして、学ぶ会が行われた1997年12月頃からサンフレッチェの約1年間を振り返る。横浜フリューゲルスの問題を発端に浮上したJリーグチームの経営難。「地元自治体、地域住民とサポーター、出資企業の三位一体化」というJリーグ理念とクラブの親会社が直面している現実とのギャップ。今、Jリーグは新たな曲がり角に立たされている。

サンフレッチェ球団が描くビジョン

1993年からスタートしたJリーグは予想以上のブームを引き起こした。連日、どの競技場も満員御礼、Jリーグチケットは「プラチナ・ペーパー」と化した。選手年俵は高騰の一途をたどり、チーム数も18に増えた。しかし、そんなJリーグも今まさに不況の波に飲み込まれようとしている。1995年から観客減少する競技場が目立ち始め、親会社からの赤字補てんで維持していかなければならないチームも少なくない。「経営難」-それは決してサンフレッチェも例外ではなかった。

1997年11月30日、サンフレッチェ広島は球団経営のスリム化を発表した。それに伴い、選手たちは年俵の大幅カット、折り合いがつかなければ移籍もやむなしという苦渋の選択を迫られる。その日を境に放出要員として高木、森保、路木らの主力選手の名前が新聞紙上を賑わす。サポーターの選手残留を訴える署名や抗議活動が日を増すことにはげしくなっていた。

そんな騒動の中で選手たちはつづやく。「金の問題ではない。この球団のビジョンが見えないんだ。」これからのサンフレッチェがどうあるべきかということを明確に出来ないままに、高木琢也のヴェルディ川崎への移籍をはじめ、

『アスリートマガジン 1998年6月号』



Jリーグ元年は全スタジアムに活気があった。

初優勝の原動力となった選手たちが広島を去っていった。

危機感の中で見えてきた光

選手、サポーター、フロントが対立の中から何かを模索し始めた1年だった。1994年の前期優勝を果たしたチームが3年後にはその存続さえも危ぶま

れている状態にある。もともと母体のマツダは一旦リーグ参加を見送っていた経緯があるため、スタートからサンフレッチェには親企業からの赤字補てんは望めなかった。前球団社長の信藤整氏は「いろいろ言われたが、身の丈に合った経営するには避けて通れなかった」（中国新聞 98年12月25日）と一連の騒動を振り返る。

また、信藤氏からバトンタッチを受けた現社長の久保允誉氏も「主力の移籍や年俸の削減がなければ、経営はもっと深刻なものになったはず」と大胆な刷新を評価している（中国新聞 98年11月8日）。

いずれにしても広島に住む多くの人々に自分たちの地域からサッカーチームが消えてしまうということについて考えるきっかけを与えた出来事であった。主力が抜けるということは確かに大きなマイナス要因である。しかし、主力が抜けた危機感から結束力というプラス要因が生まれることだってありうる。この危機感から結束力というプラス要因が生まれることだってありうる。

この危機感が1部リーグ残留の大きな原動力となったという見方をする人も少なくない。だが、危機感だけで選手を引っ張っていけるものでもない。一度は沈みかけたサンフレッチェが再び息を吹き返した裏には危機感の中で戦う選手たちに希望を与える球団フロントの意識改革があった。

『アスリートマガジン 1998年6月号』



サンフレッチェはホームゲーム時に、応援のためのフラッグ・メガホンを無料貸出している。

ファンに愛される球団を目指して

1998年6月末、3代目のクラブ社長に久保允誉氏が就任した。

「3年以内にリーグ優勝を果たし、2002年日韓共催の世界カップへ選手を送り出す」ことを目標に掲げた久保社長の体制下で新たなサンフレッチェが動き始めた。まず、球団の立て直しのために外せないのが離れていったファンを呼び戻すことだ。インターネットの公式ページ開設、オフィシャルショップ「Vポイント」を復活などファンに対するサービスが強化、「Jリーグの理念である「三位一体」型のチーム作り」に余念がない。そしてこれらの活動に後押しされるようにサンフレッチェは「1部残留」という課題をクリアした。

ただ、もう一つの課題でもある「観客数の増加」が残されたままになっている。今後もいくつも存在する後援会組織の一元化やファンとの連携、様々なイベントの実施など、スタンドに観客を埋めていくための活動が続けられるであろう。

8th 山近 義幸 氏

『就職について』

もう1つ面接に関してですが、やはり「努力」をしていない人間が「自信」を持っていると言うのは嘘だと思います。

努力をした人間こそが、自信を持つことができる。先程から面接を楽しめとか、就職活動を楽しめとか言っていますが、楽しむためにはやはり努力は必要です。「やりがいのある仕事に就きたい」と言う人はたくさんいますが、努力をしない人間にそのような仕事は絶対に回ってきません。

第8回 学ぶ会

平成 10年 3月 17日

就職について



昭和36年11月22日に山口県玖珂郡由宇町の農村に生まれる。山口県立岩陽高校卒業後、27歳の独立まで出版業界で修業時代を過ごす。8年前から(株)ザメディアジョンを法人化し、就職情報誌業界に進出。

『内定の達人』を1993年に創刊。中四国では『メンタツ』を圧倒するベストセラーとなった。続いて発刊された『仕事の達人』『採用の達人』も話題を呼んだ。

自分なりに語る

『SAPIO 97・9・24』

ここ最近の就職活動の実態についてお話ししたいと思います。実は先程まで広島サンプラザで、ある流通会社の面接をしていました。5人一組で計4グループの集団面接という形です。

来春卒業予定の3年生が3月という今の時期で自身がどういう人間なのか語れない、「自己分析」の足りないというのは大きな出遅れです。就職活動をする上で自己分析をしていないという学生は絶対いません。今日の面接でも最初のグループは決定的に自己分析ができていないタイプですので、内定をすることはできませんでした。

別にボソボソしたしゃべり方でも構わないのです。今の段階で正しく敬語が使えて、方言もなく、面接官の心を掴む話し方など期待していません。ただどしどしながらも自分のことをちゃんと話せる。例えば、「私は今、こういうことを考えている」、「こういう形で就職活動をしている」ということを自分なりに語っていただきたいのです。

就職活動で足りないと言われているのが「企業研究」です。これをしていないという人が実に多い。現在日本の失業率が3%を超えています。しばらくすれば5%を超えることになるでしょう。ほとんどの会社が2時間くらい会社説明をした後、面接、面談をすると思いますが、その段階で会社の経営状況や仕事内容を、あるいは業界の全体像を把握するという形で確実に企業の研究をしてもらいたい。そして、戦略ミスだけは絶対にしないこと。就



リクルートスーツに身を包み、就職戦線へ

職活動が3月の今から始まるとすれば、残り3ヶ月が勝負になります。遅くとも5ヶ月経てば決まっていますでしょう。

ちなみに、国立理系の学生だともう決まっている人もいます。私立文系の学生は最低あと3ヶ月、長くて5ヶ月間は生き残るため、勝ち残るために必死の思いで就職活動しなければなりません。そのためにはまず、「戦略」を立ててください。戦略というとマニュアルみたいに聞こえるかもしれませんが、計画を立てるということです。例えば、「3月末までに自己分析は絶対終わっておく」とか、「合同説明会は5社くらいはブースを訪ねる」といったようなスケジュールを立てることで。特に面接は最初に慣れておかないと絶対無理ですから、希望する会社を受ける前に最低5回は経験しておく必要があるでしょう。

最近の就職活動で重視され始めているのが「レセプションカード」というものです。企業は皆さんの履歴書などあてにしています。履歴書よりも「レセプションカード」、「訪問者カード」、「エントリーシート」といったも

のに重点が置かれている。第一勧銀やサントリーなどは6ページにも渡るレセプションカードを使用しています。それを書けるような人でないと内定はむずかしいようです。

面接はコミュニケーション

作文も当然書けないといけません。一番大切なのは「面接」です。大手企業なら試験が優遇されると勘違いする方もいらっしゃいますが、どの企業に聞いてみても面接を100パーセント重視しています。

私からのアドバイスとして心に留めていただきたいのですが「面接はコミュニケーション」です。もちろん、プレゼンテーション的な要素も必要でしょう。ところが、学生というのはどうしても自分の思いを前面に出したがる。つまり、自分を売り込みたがるので、どうしても相手に伝わらない。話を聞いてコミュニケーションを取るということを意識していただきたいものです。もしかしたら就職部の指導なのかも知れませんが、自分を売り込まんばかりに喋り過ぎて、何を言っているのか分からないという学生を何人も見てきました。

最初はコミュニケーションから入って、少しずつ自己PRなどをしながら思いを伝えていくこと。最初から自分を売り込もうなどと思わないことです。それと、間違ってもらうと困るのですが、「面接官は敵ではない」ということです。よく、「面接官に勝ってこい」とか、「今日は面接で勝負だ」と言われますが、それは間違いです。

面接官の8割はあなたの持ち味を出しやすく、喋りやすくしてあげようと思っています。

もちろん、例外もあって、皆さんもよく耳にされるような「セクハラ面接」や「圧迫面接」も現実にあります。しかし、だからといって緊張することはありません。例外ということは、ほとんどないということですから。

先程も言ったように、面接は絶対に慣れが必要です。だから、最初に第1希望とか、本命に行かないようにしてください。

就職と恋愛は同じ

はっきり言いますと、就職活動は恋愛と同じです。初恋の人と結婚するというデータはほとんどありません。多くの人は、少なくとも何回目かの恋愛をした人と結婚するでしょう。就職も同じです。様々な会社を訪問して、その中から自分と合っている会社と出会う。なのに、去年の10、11月頃から、「私はここに就職するために生まれてきた」と言う人もいますが、それでは就職などできません。

就職活動とは様々な会社を見るせっかくのチャンスです。皆さんが企業の経営者に「御社はどんな会社ですか」と堂々と聞けるのは人生の中でこの時しかありません。これは、就職活動している学生の特権なんです。私も様々な企業の面接に携わっていますが、社長さんが「今度〇〇に出店するのだ」と学生に喋ったりすることがあります。ついつい企業も学生にがんばっているということを言いたくなってしま

うようなのです。いろいろな会社を訪問して欲しいなと思います。

気分転換する時間を持つ

面接において必要なことは「リラックス方法」を増やすということです。デートをするのも、映画を見て感動するのも、リラックス方法の一つです。そういうリラックスできる方法をこの就職活動の時期に減らさないでください。就職活動と大学受験とは違います。よく、「就職活動が大事ですから」と言って、やりたいことを我慢する人がいますが、それは絶対おかしいです。

大事なことは、リラックスをすること。皆さんはこれからストレスが溜まってくるわけですから、それを発散するためにも今まで通りやることです。その方が絶対に表情が明るく、生き生きとしていられます。セーブしている人に限っていい結果は出ていません。

しかし、それでは企業研究や自己分析をする時間がないと思うかもしれません。でも、学生の段階で時間を一杯有効に使っているという人なんているでしょうか。私は今まで会ったことはありません。リラックスする時間を減らさないで、もう一度自分の日常を振り返り、無駄だと思う時間を減らせばいいのです。とにかく、充実した時間や楽しいことをしながら就職活動を続けたいと思うのであれば、ちょっと朝早く起きればいいのです。絶対に人間は夜より朝の方が集中できます。そういう理由で夜型から、朝型に変える

ならいいと思います。そのようにして、無駄な時間を消去すると、自分の時間は絶対出てきます。私はタクシーに乗ると必ず本を読むようにしています。ずっと景色を眺めているというのが時間がもったいなくて一番嫌いです。皆さんも無駄な時間を減らしていけば、絶対に睡眠時間を減らしていくことなどないと思います。

どうしても無駄な時間がないという方は睡眠時間を削っていただくしかありません。私が勤めていた頃の睡眠時間は5、6時間でした。今は平均3時間55分と一日の睡眠時間を決めています。そのくらいでも全然眠たくありません。20代の皆さんは1、2時間ぐらいなら削っても大丈夫でしょうから最悪の場合、睡眠時間を削ってください。就職するとともに睡眠時間を

取れることなどまずありませんから。

『SAPIO 98・4・22』



日々戦いのビジネスマンにひとときの休息

常識をわきまえる

あと、「常識」というものを学んでもらいたいです。常識やマナーは決してマニュアルではありません。

常識とマナーは本当に大切です。発言の中に敬語がきちんと使える方、使えなくても敬語が気持ちの中にあるというか、失敗しても相手を敬う心があるということは本当に大切なことです。面接などで堂々と遅れてくる方がいますが、これではいけません。マナーはきちんと身につけたいものです。

電話も大切です。私は学生に「遠慮しない電話してきなさい」と言っているの、一日5本くらいかかってきます。しかし、電話の基礎ができていません。学校名や名前を名乗るとか、挨拶をするとか、かく言う私も20代の頃は、そういった基本的なことで3年間くらいは非常識だと怒られ続けました。皆さんにはそうなって欲しくありません。

『SAPIO 97・4・9』



合同就職セミナーはどこも長蛇の列

今の世の中「個性」をはき違えている人が多い。個性というのは、最低限の常識やマナーを守った人間だけが許される。人に迷惑をかけたうでの個性は世の中に必要ないと思います。

個性はすごく大切です。確かに面白い個性の学生は採ります。しかしそのような学生は採っても、嫌な個性の学生は採りません。最低限の相手を敬う心、最低限の常識などは身につけておかなければいけません。人が一生懸命話をしているのに、携帯やポケベルを目の前で鳴らすのは一番失礼なことです。私は人前や打ち合わせ中は絶対に電源を切っておくと決めています。目の前で電話を取って話す、人前で音を鳴らすのは絶対に嫌です。

東京、大阪ではセミナー中に電話を鳴らせば、容赦なく退場させられます。ですから、常識やマナーだけはしっかりと学んで欲しいですね。

マナーというのはそれまで生きてきた人生の中で養われているものです。

私は親に感謝しているのは、時間を守れと厳しくしつけられたことです。あと、食べものを残すとか、人に迷惑をかけるなとかしつこく怒られましたので、今でも体に染み付いています。皆さんも教えられたことでいいなと思ったら、きちんと守ってください。

また逆に自分の親もチェックしてみてください。例えば私たちは約3万9千人の学生に、「来週企業博を広島と山口

で開催します。どうですか」などといった電話をかけることがあります。そういった電話に対して、決まって最低な受け方をする大人がいる。「うちの息子にそんな会社の就職は必要ありません。」「就職はゼミの教授が決めてくれますから」と言って、まともに話を聞いてくれないのです。

いくら我が子の就職のことだからと言っても、用件くらい聞いて欲しいじゃないですか。一方的に「うちはいいです」なんてガチャと受話器を置く。あれは本当つらいです。そういう情報を遮断するというのは息子さんや娘さんにとってかわいそうなことだと私は思います。

いろいろな方との「縁」

私は就職活動する学生に決まって言うのですが、一人でも二人でもなるべく多くの方と出会ってほしい。私がここまで生きてこられたのは周りにいた人々がいろいろと刺激してくれたからです。そういう刺激的なネットワーク、つながりは針治療の針のようなもので、たるんでいる自分を刺激して元気してくれます。

それから、受け売りではなくて、自分自身が考えたことですが、「縁」という言葉があります。この「えん」という読み方は人とのつながりの「縁」であると同時に、丸いという「円」にもなります。本当に「縁」には助けられます。今、私の会社の資本金は5千550万円となっています。20人に満たない会社でこれだけの資本金というのは珍しいことなのです。ご縁があった

皆さんが株を出してくれているのです。およそ6割を僕が持って、残りの4割はそういった人たちが株主になって下さっています。「あの時助けられたから。」「就職の世話をしてもらったから」ということで出資してくれた人もいます。

つながりの「縁」という言葉の読みは、丸い形の「円」にもあてはまりません。円になって、わいわい騒げば宴会ということで、もう一つの「えん」はうたげの「宴」です。特に私は独身ですから、月に1度コンパをするように決めているのですが、これが結構楽しいし、ストレス発散になる。

そして、ストレスが発散された人は艶やかです。この妖艶というのも一つの「艶」だと言えます。人に磨かれたり、揉まれたりすると、艶が出てくるものです。あまり人と会っていない、パソコンばかり一日中やっている人間には艶というものがありません。人に会うということが大切なのです。もちろん、パソコンをやっても構いません。インターネットやEメールなどネット上の友達もいいでしょう。しかしそれはパーチャルな世界に過ぎないのです。

今、私は経営者なので同じ立場の人と会うようにしています。世の中には私よりも歳を若くして重役を勤めているというような立派な人がたくさんいる。そのような方のところへ毎年1回は会いに行くようにしています。皆さんも自ら足を運んで積極的に就職活動という名目を利用して、いろいろな方と会うようにしてください。

私の履歴書

私は18歳の頃から完璧な不良といいますが、グレていましたから大学行かずに適当に就職という道を選びました。ところが、広告業界や出版業界とかで働いてみたくなり、1ヶ月で辞表を出してしまったのです。いろんなところに電話して、広島ではちょっと有名なみづま工房という会社に潜り込み、1年間がんばりました。

その後、広島タウン情報に入社しました。募集では大卒しか採らないことになっていたのですが、みづま工房での経験を完璧にPRして一応内定をいただくことが出来たのです。これには完璧に恩を感じました。当時の広島タウン情報はガタガタの会社でした。明日会社が潰れてもおかしくない、中国電力が電気を止めると言ったらおしまいの中でエキサイティングしていました。今は安定しているのであまり面白くないですけど。

その頃、社員は朝11時くらいに出社していました。僕はこれではダメだと思って、入社して1週間経った頃、会議で「皆さんは世の中のたいいていの会社が朝9時を出社時間にしているということを知っているのですか」と言って変えました。そのようにして、だんだん自分の発言力を高めるためには、売り上げを伸ばさなければならなかったのに死にもの狂いで営業をしました。その中で営業は人の話を聞けばいいんだなと途中で解るようになったのです。喋らなくていい、何でもいいから6、8割を聞いていました。すると、

「山近さんは聞き上手ね」と言われ始め、だんだんと仕事が入るようになりました。遂には売り上げの3分の1を占めるようになって、そこから発言力が増してきました。やはり20代のうちに苦勞するか、しないかは30、40代になって随分違ってくると思います。

『SAPIO 98・10・14』



女性の社会進出はどこまで容認されているのか？

今になって一つだけ反省しているのは、自分自身ががんばったと思うのですが、やはりもっと経営についての勉強しなかったということです。人から話だけ聞いて、経営が何たるかということも知らずに、数学の勉強などをがむしゃらにやっても、基礎ができていないだけにとっても苦勞しています。

皆さんは後1年くらいの時間を就職活動に費やすことと思いますが、やはり勉強するというのはいいことです。30代よりも20代の方がよく学べます。私は36歳の割には、頭がまだ若いと思えますが、やはり20代の頃より吸収力が少し無くなってきていると感じます。そういう意味でも今のうちががむしゃらにやってください。もちろん勉強や仕事も大切ですが、大いに遊ぶことも忘れないでください。

質疑応答

Q 相手と話をする場合、仕事においてもプライベートにしても短時間でいかに上手く相手に伝えるかということが大事になりますが、その場合に気を付けなければならないことはなんですか？

A 裸になること、常に白旗を揚げることです。戦闘体制を取らず、まず相手に白旗を上げて、負けを認め、相手に教えてもらうことです。裸や白旗からスタートすると、実際本当に何も無い所からのスタートになります。自分をさらけ出し、飾らないこと。もちろん、服装はきちんとしますが、自分をよく見せようとしなくていいです。

低姿勢、謙虚がうちの社風なのですが、まず相手を見下さないことです。そういう所から相手と対等になっていけるのです。年下の方や、自分より弱い立場にある方の場合でも絶対に目線を落とします。学生との面接でもそうです。

Q 山近さんが就職活動をバックアップするという仕事にこだわる理由はなんですか？

A こういう仕事を始めたのもなりゆきです。ザ・テレビジョンをやっている時にグルメガイドをやっていました。ある時ダイヤモンドという経済雑誌から5000万円のできるとい

うことで今のやっているような仕事をやり始めました。3年位してから、就職ほど人の生き甲斐に関わることはないと感じ始め、就職関連の本を書くようになりました。私達は企業と学生の間点として、どちらに対してもやさしく、厳しくしていこうと思っています。

いい就職をしている人から手紙をもらおうと嬉しいです。プライダルガイドも手がけていきましたが、目の前で人と人が結び付くのを見ていると嬉しくなります。そうすると自然に私達の周りにいてくれて支えてくれるので。似合わないかもしれませんが、いつの間にか「世話焼きの兄ちゃん」になっている。私のやっていることは人と人とをくっつけて喜んでいる仕事なので。

Q 山近さんにとって仕事とはどういうものですか？

A 快樂、昇天です。それぐらい楽しいことだと思っています。家庭も大切ですけど、仕事も同じくらい私にとっては大切です。世の中に私のような仕事に携っている人間がどれだけいるか分かりませんが、私は幸せでたまらない。私の書いた本や雑誌を読んでもらっていて、多少でも自分の考えている事を聞いてくれたり、メモをとってくれる。このような立場を崩したくないです。そのためだったら、努

力は惜しまないし、がんばっていくことが一歩ずつの成長につながる。だからこの仕事はやりがいがあると思います。休み、お金のことはあまり興味ありません。

Q なぜ、「仕事はつまらないモノだ」という人がいるのでしょうか。仕事を楽しもうとする私の足を引っ張るのですが。

A 価値観の違いだと思います。「仕事はつまらない」という人たちの、それも一つの価値観ですから否定する気はありません。その人達が嫌々仕事をしていても、明るい家庭があり、幸せならそれもいいのではないでしょうか。

ただし、私の周りには仕事を嫌がったり、辛いと思っている人はいません。マスコミ、タレント、公務員、いろんな人を知っていますが、皆さん仕事を楽しんでいます。時々過労死する人もでてきますが、そういう人たちは仕事を嫌々やっているのではないのでしょうか。経営者が過労死するなど、あまり聞かないと思います。なぜなら大抵の経営者が仕事を楽しんでいるからです。楽しんで仕事をしている人には努力、目的意識、問題意識が生まれます。もちろん、経営者は楽しんでばかりでもありません。社員の首を切るという断腸の思いをしなければならぬ時もあります。しかし、苦しいことに比べたら楽しいことの方が多いものです。

Q 私は今アルバイトをしています。母親には「バイトをしなないでもっと勉強をしなさい」と言われてしまいます。お金が欲しいというのも理由の一つですが、私としては色々な企業を見たいのです。何とか両方をこなしているのですが、どっちを今優先すれば良いと思われませんか？

A 両方ですよ。勉強もアルバイトも大切です。なぜなら、どちらか片方にすることは非常に楽なことです。両方しているから、それだけ落ち着いている自分があるのです。アルバイトぐらいできるうちにしておくほうがいいのではないのでしょうか。

Q 企業が採用期間を長期に設定しているというのが昨年（1986年）の見通しだったと記憶しています。今年は早くなるという見方があるようですが、全体的な数字で見ると何割程度になりそうですか？

A 昨年より今年は厳しいということは確かです。数字的に言えば3週間ぐらいでしょう。企業側としてはたぶん早く終わりたいというのが本音だと思います。ただ、学生側が決め兼ねてしまって、時間がかかったり、途中で逃げたりする。そういう場合は、結果的に長期戦になって、おそらく内定が6月に集中します。特に中四国の企業に関してはそうなるでしょう。

Q 私は就職志望先として考えている企業に、資料請求、会社訪問のお願い等を葉書でマニュアル通りだしました。しかし、今だに返事が帰ってきません。そういう時に電話をしようかと迷っていると、某女子大に通っている知人がやはり私と同じようなことで電話をかけたら、逆に会社から怒られたという話を聞いて電話をするのが怖くなっています。自分を売り込むためにはこのようなことも必要なのかもしれないと思っていたのですが、あまり電話はしないほうがよいのでしょうか。

A 資料請求に対して返事がないという必要な電話なのですから、かけることは200%正解です。「怒られた」というのはおそらく言い方が悪かったのだと思います。あるいは何回もしつこく電話したのであれば、怒られるかも知れません。普通に電話して怒られたという話を私は聞いたことがありません。

Q 仕事をやっていて本当によかったなとか、やりがいを感じた時のエピソードを聞かせていただけないでしょうか。

A 本が完成した時とかイベントが成功した時とかはやはり感動しますね。また、来週と再来週と広島で就職のイベントを行わせていただくことになっています。1万人は無理かもしれませんが7、8千人は来ていた

だけだと思います。

このイベントも最初の頃は86人しか集められなくて、苦労しました。その頃は、ゲストを呼ぶのが主流で、すごかったのがプロレスラーの大仁田厚さんをお招きした時でした。2800人が、並木パラストの6階の階段から長い列を作っていたので、警察が出動する騒ぎになってしまったのです。これには警察から大目玉をくらいまして、「すみません」と涙を流しながら謝りまくりました。その当時は社員が8人いたのですが、2人が救急車で運ばれて、そのうち1人が死にかけるぐらいすごかった。今でもあの思い出にかなうのはちょっとありません。

Q 人との「出会い」は大切だとおっしゃっていましたが、山近さんにとって新たな転機となった「出会い」というのがあれば教えてください。

A 困ってしまうくらい沢山あります。よく、「尊敬する広島社の社長はだれですか？」と聞かれませすけど、難しい質問です。……そうですね、先ほどお話ししたプロレスラーの大仁田厚さんとの出会いでしょうか。彼の礼儀正しさから、ちゃんとしたマナーを身につけることを学びました。

感想

梅田 真理子

「20代のうちで苦労するかしないかで大きく違う。勉強においても30代だと20代より弱い。」この言葉は20代真っ直中の私の心に強く印象に残る言葉になった。20歳になった時は20代をどう生きていこうなんてことをものすごく考えたものだったのに、たった2年の間でその考えも日に日に薄らいでいっている。漠然と日々を過ごすことも多くなった。しかし、今回も山近さんにお会いして自分の甘さが身にしみて分かった。口ではいろんなことが言えるが実際、行動に移してみれば口で言っているほどのことはできていない現状に気づく。「努力という資格が成功のポイント」と言い切れるようになるためには、私にはまだまだ努力が足りていない。山近さんのように「仕事は快樂」と言い切れる様になりたい。やりたいことを仕事にして、バリバリ働きたいと痛切に思った。

小川 美代子

就職というものは、学生時代というモラトリアムを終え、初めて、自分自身のための生き方を決定する“チャンス”だと私は考えている。実際、仕事をするかどうかは別として就職活動自体は経験として味わう価値がある。現実を突きつけられ、自分というものを思い知らされ、辛いことは辛い、認められたときは大きな喜びを感じるだろう。

しかし、焦らなくても良いと思う。

まず、自分がどうしたらいいか、それを見極めなくては何も始まらない。動機と目的も生まれない。

その分析とチャンスが重なったとき、人は本当に幸せになれるのだと私は思っている。

堀川 竜太

私は山近さんの「面接官を敵に思いな」という言葉で、かなり面接に対するイメージが変わった。今までは、良いところばかり見せようとして本当の自分を隠し通していた。要するに「マニユアル君」だった。よくよく考えると、そんなものは何度も話を繰り返すうちにばれてしまうものである。これからは自分をさらけ出していこうと思う。

森田 理恵子

『私にとって仕事は快樂です。そして今の仕事は天職です』。

現在、日本全国のどれだけの人がこうはっきり断言できるであろうか。『仕事は金を得る手段』と言う俗説がまかりとおるなかで山近さんのこの言葉はこれから就職活動をする私にとって衝撃的で決定的であった。いよいよわたしたちは就職戦線に突入する。自分にとって価値のあることは何なのか。そして自分が一生をかけても悔いのないものとは。少しでも地域社会に貢献でき、自己実現につながる仕事そして会社を見極めていきたい。

海上自衛隊呉基地及び

江田島教育参考記念館見学報告

五省

- 一、至誠に悖るなかりしか
- 一、言行に恥づるなかりしか
- 一、氣力に缺くるなかりしか
- 一、努力に憾みなかりしか
- 一、不精に亘るなかりしか

海上自衛隊 呉基地

護衛艦内見学

平成 9 年 5 月 18 日

私たち岡本ゼミナール 5 期生平成 9 年 5 月 18 日、呉基地にて護衛艦見学を行った。まずは艦内の一室で隊員の方から艦内見学のための説明を受けた。その後、三班に分かれて居住区、食堂、甲板、操舵室などという普段の生活において見ることが出来ない所まで案内していただいた。見るもの全てが珍しく、また驚きの連続であった。

各班の説明のために同行して頂いた副艦長の氏原さんをはじめとする隊員の方々は、非常に気さくで時折ユーモアを交えながら説明して頂き、私たちは思う存分見学ができたように思う。また、質問などにも快く答えてくださり、海上自衛隊に対して抱いていた固いイメージは随分変化した。



江田島教育参考館見学

旧海軍兵学校は明治 21 年 8 月東京築地から江田島に移転以来、アメリカのアナポリス、イギリスのダートマスとともに世界の 3 大兵学校としてその名をはせたが、終戦により昭和 20 年 12 月 1 日、約 60 年の幕を閉じた。その後、10 年間は連合軍が教育施設等に使用していたが、昭和 31 年 1 月に返還され、当時横須賀にあった術科学校が移転し、また、昭和 42 年 5 月に幹部候補生





が開校し、その後、江田島病院、第一術科学
校生徒部の開設があり、現在に至っている。

教育参考館には、旧海軍がたどってきた
歴史が見られるようにと、海軍関係者の書、
遺品、そして、第二次世界大戦において、特
攻隊員として命を散らした若き隊員達の遺
書、遺品が保存されている。また、海軍兵学
校の学生達の日常風景などを撮った写真、
卒業していった学生達の名前、歴代校長の
写真などから、当時の兵学校の様子なども
見ることができる。



この教育参考館を見学することで私達は、
東郷元帥が連合艦隊解散のときに発した文
章に託した思い、特攻隊員達が自分の愛す
る者や未来の私達の幸せのため、そして、そ
れを守るため、彼らがどのように考え、思っ
ていたのかということにほんの少しでも触
れられ、わかることができたように思う。



見学者感想

江田島見学を終えて

阿部 直文

私は江田島見学の中で教育参考館の見学が一
番印象に残った。

90分という見学時間の中で、すべてに目を通
すことは出来なかったし、うまく理解できな
かった文章もあったが、当時の戦争に関わった
人達の心が垣間みれた気がした。江田島見学に
参加したことによって自分にプラスになったか
はわからないが、教育参考館の見学や呉で見学
した護衛艦など貴重な体験が出来たと思った。

遺書に囲まれて

石川 直子

特攻隊の方々の遺書を何十通と見て歩いた際、「何も言い残すことはありませんよ」「国の為に」という言葉がとても目についた。父や母、他の家族を気遣う言葉で締められた文章上に、「死にゆくこと」を拒否出来ない状況にあった隊員の方々の本音はあったのだろうかと思う。

隊員の方々と同年代の私だけ、今現在ある私に当時を生きていくこと、他への忠誠のために死ぬことができたのだろうかと考えたとき、自分がひどく未熟な人間に思えた。

生きることも死ぬことも自由で、本音も自由に表現できる今の時代に生きている私が「自分への甘さ」「他人への甘え」をどれだけ持っているか、自分を振り返る良い機会となった資料館見学でした。また、護衛艦の見学では艦内を探検しているみたいだと、かなりはしゃいでました。護衛艦に乗れたこと、すごく嬉しかったです。

'97・5・18 自衛隊見学

池尻利行

資料館の中には胸に数多くの勲章をつけた軍人の姿があった。彼らはみんな日本の為に前線で闘い、そして戦死した。そんな悲惨な歴史の上に今の日本がある。しかし幹部クラスの将軍だとか大将だとか、全てが遠い物語の中にあるような印象を受けた。国民の上に立ち指揮していた人間が何を考えていたのか、自分の人生をどう感じていたのか、なぜ戦争なのか正直まったくわからない。それは今の僕だけでなく戦時中のいわゆる捨て駒的存在だった若い世代も同じだったのではないだろうか。ごく普通の青年が劇的な

戦死をしたことで軍神として崇められる。そういった政治的な状況があった反面で、今の僕らとなら変わりなく友人を家族を想いつつ死んでいった兵隊がいたというのが事実であろう。

敗戦間近の沖縄にて、死ぬ直前の遺書に「必ず撃沈です。ニッコリ笑って体当たり」とあった。無駄とでも言うべき死に直面した時、彼らは本当に「思い残すことはなし」と思っていたのだろ



江田島の自衛隊見学

石井 瑞穂

私は自衛隊の事を余りよく知らなかった。こんなに身近なところに海上自衛隊が存在することも。まずは呉の港でたくさん護衛艦を見た。その巨大で灰色の護衛艦は、私の目に不気味にうつった。そこにある全ての艦船の色は灰色で、大きなアンテナやミサイル発射台がついていた。中も案内してもらったが、拳銃が備えられたりしていて怖かった。

呉を後にして、江田島の海上自衛隊第一術科学校を見学した。その資料館には私とほぼ同年代の人々の遺書が展示されていた。戦争中に特攻隊として国のために戦い、そして死んでいった人々の遺書だ。目を覆いたくなるような文面ばかりで、その中でも血で書かれてあったも

のを読んだ時は本当にいたたまれない気持ちになった。

私は自衛隊に賛成も反対もしないが、戦争がない時代になった日本でも災害はなくなることがない。そのことを考えると自衛隊は私達に必要不可欠なものではないかと思う。

今私達が出来ること

伊妻 猛

江田島の自衛隊の見学をして、改めて戦争の悲惨さを確認させられました。私達と同じ歳には、天皇のため、国のために飛行機に乗り込み、相手陣に飛び込むことを正しいとする考えは、今の時代には考えられないことです。それから、相手陣に突撃する前に書いた遺書を読んで、どれも深い悲しみをおぼえました。今この時代に生きている私達は何不自由なく平和に暮らしてますが、この様な時代があったことを決して忘れません。そして、後世に伝えていくこと、それが今の私達に出来る役目であり義務だと思いました。

江田島見学

上重 十郎

今、自分が生きている中で何といったつらいこともなく、それはうれしく思うべきなのか悲しく思うべきなのか。江田島で見学した戦争に行った人達は食べるものはちゃんとあったのだろうか。毎日生きるか死ぬかという身の凍るような中でとてもつらかっただろう。自分にこれほど緊張感を味わった時が今までに1日、1時間とあったのだろうか。今、自分はこういった緊張感を味わえる場へ行き、精神的に強くなりたい。そして、いろんな所に目をやり、自分に取り入れるべき事はどんどん取り入れていきたいと思った。

このことは結局自分のため、そして人のためになると思う。

自分はこのように先をどんどん見つめて生きていける。でも戦争に行っていた人達はいろんな事が頭には浮かぶだろうが、全部が全部プラスには考えられなかっただろう。今の時代に生まれてくれたことをやはりうれしく思うべきだ。



豊かさの代償

梅田 真理子

「世の中が豊かになった」とよくいわれる今日。「豊かさ」ばかりが注目され、その「豊かさ」を支えた歴史だったり人々だったりする事はもう忘れられたに等しいような気もしなくもない日常において、今回の江田島見学は強烈だった。私が広島に来て間もない頃は、あんな街中にドカンと戦争のあとが色濃く残る原爆ドームがある事自体驚きと恐怖でいっぱいだったのに今ではもう見慣れてしまったただの風景でしかなくなった。それだけ過去は遠くなってしまっていると思う。

特に強烈だったのは、海軍の資料館にあった様々な遺書だ。最初の方はまだまだ日本の勢いがあった時期に兵隊として様々な軍役についた時のせいだろうか、とても力に満ち晴れ晴れしささえるものも多くあった。しかし、だんだん戦況

も悪くなった時期、いわゆる死を持って国へ報いるという特攻戦死の人々の遺書には、誇りと共に死を覚悟したまさに遺書という文面であった。父母、兄弟への最後の言葉や、未来の人々のために自分の命を捧げるなどの言葉、血で書いたものなど、涙が止まらなかった。自分達とほぼ同じ年の人達がこんな思いで死んでいったなんて信じられない一言だった。今の「豊かさ」はこんな人々の血と涙で培ったものなのだとあらためて痛感した。

「豊かさ」にひたひたしている私達にはこのような人々の存在を忘れてしまっているところが往々にしてある。幸せな毎日、安全な社会に甘えることなく自分の力を最大限に伸ばしていこうとする姿勢が、たくさんの豊かさを培って下さった人々に対する恩返しではないかと考えさせられた1日であった。

見学の感想

小川 美代子

自らの命を賭けて、愛する者を守る、それはとても美しい姿だ。特攻隊員の写真を見ると、説得力が増す。……過去、どういった出来事があり、それによってどのような結果となったかを知るのとは大切なことだ。今回の見学は、それには大変役だった。

しかし、見学をしていて、戦争の恐ろしさ（カラクリ）について一つ気が付いたことがある。自分の家族や愛する者を守り大事にする気持ちはあっても、相手（敵国）にも同じ様にそれがあるという思想が、すっぱり抜けてしまっている。「愛する者を守る」という思考のベクトルを決して、「敵国の兵士にも愛する者があり、自分が撃てばどうなるか」とい

う向きに向かせないのが戦争なのだ。純粹な気持ちは、利用の仕方で大変な武器になる。とはいっても、全世界の人を平等に愛するというのも非現実的な話である。とにかく戦争がバカらしい事は間違いない。

江田島の自衛隊見学で

小倉 恵子

「高校までの歴史の教科書にない“何か”を見つけることができた」これが私の江田島資料館見学で感じたことです。“何か”とは、敗戦により、歴史の最も奥の場所に追いやられた勝者側である連合軍に不都合な部分であり、戦時中の個人であり、日本人という精神性などのことです。

私にはこれらが現在において、特に30代よりも若い年代の人々が年配の人々から受け取り損ねたモノであるように感じられました。私達はこの場所で生を受けた以上、過去のこととして知っておくべきことがあるし、また忘れてはならないことがあります。たとえ、それが自分達が生まれる以前のことであってもです。

私にとって史上の人物である、東郷平八郎、山本五十六、広瀬武夫らによって書かれた文章を目にすることは、現在までにさまざまな人々や歴史によってねじ曲げられた歴史観から解き放ってくれる役を果たしてくれました。この文章を読むことで、“歴史上の人物”から一個人として彼らを見ることができました。

回天や特攻隊の出動命令を受けた人々に対しても同じです。それまでは、どちらかといえば彼ら全般に時代の流れに巻き込まれた人々として同情の念を持っていたように思えます。けれども、一部ではあっても彼ら一人一人の遺書を読むこ

とによって彼ら個人個人の価値観、死を受け入れるときの気持ち、思いやり等を背景とした歴史を見ることができました。現在の人々が多様であったように当時も多様な人々がいたのでしょうが、今回ごく一部であれ、その時代のその瞬間の人々を垣間見ることができ、本当に良かったと思います。

今回の見学で本当にさまざまなものを学びました。このことを心にとめて、改めて現在を見直しながら、生きていきたいと思います。

見学の感想

吉川 真琴

私にとっての死とは、とても遠い存在で、平和に浸かって生きてきたために、今までを何の不自由もなく、人に支えられながら生きてきた。この見学に行き、遺書や写真を見ながら、自分が情けなくなった。どんな気持ちで短い人生を送ったのだろう。今の私と変わらない歳で何を思いながら、遺書を書いたのだろう。遺書からは、書いた人が誇りを持って人生を精一杯生きたという事が伝わってきたように思う。この江田島見学で多くを学んだ。私も自分の人生に誇りを持って人間らしく生きていきたいと思う。

下級軍人達の悲劇

工藤 耕輔

護衛艦に乗った時、規律がしっかりしているのを感じ、イメージ通りだった。何をするのか分からなかったので、一日入隊でもするのかと冗談で言っていたが、そんなことはなかった。護衛艦の中では特別な感動はなく、「へー、そうか」と言うぐらいだったが、昼食のカレーはうまかった。

その後は資料館へ行った。最初は字が多くて、しかも読めなくて、頭が痛かった。しかし、遺書の所へ行くと、考えが変わった。写真に写っている人の顔は、たいいていの人が堂々と、しかも笑っている。また、読める遺書を読むと、お国のためとか天皇のためとか書いてある。本当に死ぬ時はそんなことよりも、自分や家族や恋人のことを思うのが普通だと思うが、そんなことは書けない時代なのか、国の教育がそれほど徹底しているのかと考えたりした。死ぬ時まで本心を隠さなければならない。いやもしかしたらそれが本心なのかも知れない。そう考えるとその時代の悲劇が伝わってくるようだった。

23

河内 秀雄

回天の立案をした人の年が、僕らと同じような世代ということを知り.....正直言って驚きはありませんでした。

「.....かもしれないな。」

敵と闘うことを勇ましいとし、闘えることを誇りに思っていたとしたら、巨大すぎる敵ではあるが、自分の能力をぶつけられる、そして軍部内で自分の立案が認められた時のことを考えれば、23才の彼の、ある一事を成し得ようという充実感にああふれていたのではないだろうか。もちろん、実際に製作していたその時、作っているものから考えてみても、負けはわかっていたはず。しかし、これを作り上げ、発射しなければならぬ、尊すぎる人命を乗せて...、しかもこれを立案したのは自分自身。苦しかったろう、いやすでに狂おしくもあったかもしれない。その心境は例えようもないものだったろう。

時を越えて伝わることは

崎本 孝

教育参考館に入ると、静寂な風が私を出迎えてくれた。階段に敷かれた赤い絨毯をゆっくりと踏みしめる。

山本海軍大将の継ぎ接ぎだらけの靴下、連合艦隊解散時に行われた東郷平八郎司令長官の訓示などを見て、伝えたかったのは殺戮ではなく、人として欠くことのできない心だということがわかった。いい事なのか悪い事なのか、わからなくなっていることだけがわかっていて程度の若者には想像できないような揺るぎない精神が、過去の日本にはあった。

特攻隊員の数々の遺書。その中に綴られた愛する人々への言葉。えもいわれぬ迫力に胸がいっぱいになった。空に、海に、大地に散った幾多の魂の上に、私の日常があるということ思い知らされた瞬間の、何とも言えない後ろめたさが心を支配する。

帰りの車の中で、これまでの大学生活をふりかえてみた。平和な時代の、なんでもない日常さえも満足に生きられない自分は、一体何者なのか。その答えをみつけるまで誠実に生きていくことが、戦火の中で命を懸けて戦った人々への恩返しだと思う。



岡本先生の言われた精神的なものとは？

高橋 宏之

この見学会で私が資料館で目にしたものは、国の為に命を投げ出して戦おうと志し、特攻などで死んでいかれた方々の遺書でした。当時は、「お国の為」という言葉のもとに個人の命より国が大切とされた時代と聞きます。「精神主義の前では個人的な弱音や、主張も許されなかった」というイメージが強いのですが、現代においては精神主義はもうあまり存在しないように思えます。その理由として乱れた言葉での個人的主張があふれている、といったことなどが挙げられるのではないのでしょうか。自由の名のもとに、いいたい放題にしている自分の姿に気付いたような気もしました。

決して戦時中の日本が良かったとは思いませんが、平和と自由を手にしたのをきっかけに、人は自分のことばかり考え、人生に対してもあまりにもお気楽になってしまったように思いました。岡本先生が言われたかったことはそういうことだったのでしょか？

現在があるということ

谷本 美紀

情けなかった。何も知らなさすぎていた。自衛隊の活動も過去の歴史も。何もかもが当たり前、平和にどっぷり浸っているこの身体、そのことに何の疑問も持たないこの脳は麻痺している。

文明は進化しているけれども、人の心は退化しているように思う。戦場という死と隣り合わせの場で沈む船の中で乗組員の遺族を気遣う遺書が書けるだろうか。自分が火だるまになっても指揮が取れるだろうか。行方不明の乗組員一人のため

に攻撃されている船に探しに戻ることが出来るだろうか。自分は出来ないと思う。もし自分が特攻隊として戦場に行かなくてはならない時、「自分の人生悔いなし」と言えるだろうか。逃げてばかりの毎日で自分は一体何をしているのだろうか？どんな状況でも他人のことも考え、行動できるような心の広い人間になりたい。死ぬときに笑って死にたい。「悔いなし」と。

過去の歴史も知らず、過去の上に成り立つ現在ということ忘れてはこれ以上自分の成長は無いと思う。成長したい。この1年が勝負だと思う。江田島見学は様々な事を考えるよいきっかけになった。



見学の感想

田村 智宏

守るべきもの、やるべき事が明確に存在していた当時の社会状況は、何不自由な世界に寄生して生きている私にとって、羨ましいと感じさせる点も多少あります。問題はその状況、生きる理由と死ぬ意味を比較的簡単に手に入れることができる世界は、実際に死んだ若い人達自身によって全てつくり出されたわけではないということでしょう。

結局その辺りが、“戦争は否定されるべきもの”という考えの根っこの方にあ

る要素の一つではないでしょうか。誰でも自分の生きる道、死に時こそは自分で決めたいでしょうから。

江田島感想

庭谷 育壮

僕の心に残ったのは、大きな護衛艦や大砲よりも資料館にある数々の遺品だった。資料館に入ってすぐに、立派な造りと、多くの遺品や絵などに感動を受けた。でも正直言って途中ぐらいから退屈になっていた。「回天」、それが僕の目に飛び込んでその人達の遺書を読んでいくうちに退屈な気持ちは吹っ飛んだ。それどころか、胸に熱いものがこみ上げてきて、僕は泣いた。同年代の若者らが当時こんな思いで、死を覚悟して、人のためと国のために戦ったのだと思うと、いろんな思いが胸を駆けめぐる。こういう過去の歴史があって、こういう人達がいる、今の僕らが生きているんだと、そんな思いでいっぱいだった。この江田島見学は意味のあるものだと思う。これからも続けていくべきだと思う。カレー代600円だけで行けるし。

人の持つ死に対する価値

橋本 泰孝

人八何時カハ死ス 死スベキ時二
人タルノ値生ズナル

亀田尚吉（18）の遺書より

私が見てまわった資料の中で一番気にかかった言葉です。この言葉を見たとき、なぜ、死ぬ時にこの言葉が思いつくのか、だいたい人は両親に対してのメッセージが多い中、自分自身の栄光のための遺書だったのではないかと私は受けとめました。回天・神風共に自らの命を犠牲にして国のために死ぬという精

神を持つ事ができた、自分と同じぐらいの若者に会って話をしてみたいです。

私が将来子供ができて、自分で考える力が身についたら、連れて行き自らの目で平和がなかった人々の心境を感じとってほしいです。私自身が感じたように。



見学の感想

藤野 高正

今回、特に印象的だったのは神風特攻隊の方の遺書だった。最初はこれから死ぬというときによく言葉が出てくるなあと思っていたが、ある遺書の前に止まったとき足が竦んでしまった。もの凄く綺麗で力強く書かれたその遺書を書いたのはなんと18歳の人だった。今の自分よりも若い人間があんな立派な文章を書ける……しかも死ぬことが解っているのに。もし自分が同じ立場でも彼等のようにはなれないと思う。戦争は多くの人間を殺してしまうだけでなく、人間そのものを変えてしまうものだと思い知らされた。

特攻隊と私

堀川 竜太

今日の江田島見学はとても貴重な経験になった。呉で護衛艦を見て回ったとき、そのスケールの大きさに圧倒された。どんどん進歩していく兵器を目の当

りにした驚きとともに、ちょっとした恐怖を感じた。江田島の資料館の中で一番ショックを受けたのは特攻隊員の遺書を見たことだ。その遺書の一文に「死の恐怖よりも鬼のような教官との地獄の訓練がなにより恐怖だった」とあり、これは今から迎える死をもろともしないという想いを起こさせるほどの軍事訓練の徹底ぶりを強く感じさせるものだった。その他には、隊員が自分の家族の体を気づかっている一文を見てとてもつらかった。

江田島の資料館の遺書を読んで

本川 晶子

江田島の資料館の特攻隊の人達の遺書を読んでいた時、一番はじめに思ったことはみんな命を捨てることにためらいを持ってないのかと思った。それは遺書にそんなことは書いてなかったし、その気持ちがよくわからないのかもしれない。その遺書の中で「そんなに悲しまないで下さい」というフレーズがあったがそれは無理だろうと思った。家族にとっては大切なひとだから、それを読んで何だか泣きたくなった。

ためにはなったと思うが自分の考えとは合わず、反感をおぼえることが多かったように思える。

江田島見学をして

三島 守登

私がいちばん深く感じたことは、今の時代と過去ではかなり違うということである。何が違うかということ、考え方の違いを大きく感じた。現代人の自分本位の考え方でもし戦争になったら、きっと世界中はパニックのになるだろう。現代人は過去の「人のため、国のため」という考え方を学ぶ必要があるのではなからう

か？このことは私自身にも言えると思う。自分の興味が無いことや知らないことなどは、自分の中に取り込もうとしない……つまり自分の心の殻から抜けだそうとしないのは、自分自身の成長を妨げることになると思う。このように、江田島見学は今後の自分にとって、とても参考になった。



江田島自衛隊見学

六車 善伸

呉基地の方ではまず艦隊を見てすごく驚いた。そして船に何か起こった時に、
1、あわてるな 2、服は着用 3、早く船から遠ざかれ 4、集団を作れ
5、無理泳ぎするな 6、水中爆発、鯨に注意 という教訓や細かい計器類などの説明を受けていると、こんなに自衛隊は危機管理について考えているのかということが分かった。

江田島の方ではいろんな施設の説明と資料館を見せてもらった。資料館の中では、遺書がやはり一番考えさせられた。父、母、兄弟への配慮が多く、その頃は特に家族思いだったのだなと思った。そして、「国のために死ぬ」とか「花のように散る」のように死を例えていて死が美化されているのが、今の日本からでは考えられない。

江田島での遺書

森田 理恵子

私達は戦争を文章や、絵を見たり聞いたり考えたりすることはある。しかし、戦争を感じることはどれほどあるだろうか。どういうことかという、私が小学生の時のことである。平和教育として、いろいろな話を聞き、戦争がいけないことだと思っていたし、知っていたつもりでいた。知識として。

しかし、先生に勧めていただいた『はだしのゲン』を読んで子供心に衝撃を受けた。読んだ日の夜は寝付きが悪く、寝ても夢にまで出てくる始末。その後、平和学習と言うことで平和公園に行ったが、資料館の展示物が怖くて、よく観ることもできず、作文にも手がつけられなかった。私は戦争を感じるということは、こういうことだと思う。

今回は江田島の遺書や遺品から、戦争を感じた。これは、文章やデータでは見えない一人一人の生き方であったり、顔が読みとれたからだ。

私達はもっともっと戦争を感じなくては、また感じる機会をもたなければ動けない。

動けなければ、未来の平和はいつまでたっても、夢物語に終わるのではないだろうか。



学ぶ会・担当

第1回

石川 直子	上重 十郎
工藤 耕輔	高橋 宏之
谷本 美紀	田村 智宏
藤野 太郎	

第2回

阿部 直文	石井 瑞穂
伊妻 猛	庭谷 育壮
橋本 泰孝	本川 晶子
森田 理恵子	

第3回

石川 綾子	梅田 真理子
小倉 恵子	崎本 孝
橋口 千聖	藤野 高正
三島 守登	

第4回

阿部 文恵	池尻 利行
小川 美代子	吉川 真琴
河内 秀雄	堀川 竜太
六車 善伸	

第5回

石川 綾子	伊妻 猛
梅田 真理子	高橋 宏之
田村 智宏	橋口 千聖
本川 晶子	

第6回

小川 美代子	吉川 真琴
工藤 耕輔	河内 秀雄
崎本 孝	藤野 太郎
藤野 高正	

第7回

石川 直子	小倉 恵子
上重 十郎	谷本 美紀
庭谷 育壮	堀川 竜太
六車 善伸	

第8回

阿部 直文	阿部 文恵
池尻 利行	石井 瑞穂
橋本 泰孝	三島 守登
森田 理恵子	

おわりに

この報告書を作成する上である前提がありました。それは「自分が担当した報告書は責任を持って携わる」という事です。会の運営は班単位で行われてきました。準備から本番、そして最後のまとめまでやり通すということ。それが、ボランティアで講師を引き受けて下さった方々に対する礼儀だと考え、ゼミ生全員に理解を求めたのです。結局、完成するまでに一年近くかかってしまいましたが、ゼミ生一人ひとりが自身の責任と能力の範囲内で制作しております。ぜひ、お手にとつて一読して下さることを願ってやみません。

社会で働くということがどんなことなのか想像しきれない学生時代に、角界の一線で活躍されている方をお迎えして、お話を伺えたことは大変貴重な経験でした。

責任を持って仕事をする方の言葉には重みがあります。「やらなければならないこと」に対して誠実に生きていく人の姿をどう受けとめたか……ゼミ生一人ひとりが自身の生きていく道のりの中でその答をだしていくことでしょう。

岡本ゼミが運営している「学ぶ会」も5年という節目を迎えました。その間、実に多くの講師の方、OB・OGがこの会に携わってこられたこととなります。私たち5期生一同も、ほんの一時ではありますが、このような会に参加できたことを嬉しく思っております。講師の先生方をはじめ、お世話になった全ての方々に厚くお礼申し上げます。

報告書編集担当 崎本 孝

学ぶ会・講師一覧

平成5年度

【1期生】

第1回(5月24日)

「禅から見た人材観」

仏通寺持地庵住職

浜田 徹道

第2回(6月21日)

「企業から見た人材観」

株式会社ライトウェル

岡本 明

第3回(7月24日)

「女性の目から見た就職選び」

月刊び〜ぶる

児玉 真美

第4回(9月30日)

「目的意識を持つことの重要性」

前広島県議会議員

河井 克行

第5回(10月25日)

「今、伝えたいこと」

広島テレビ放送

上重 五郎

第6回(11月22日)

「広島の開発と銀行の役割」

広島総合銀行

田辺 清隆

第7回(12月12日)

「白紙の原稿から」

合気道師範、小説家

小田 敏彦

第8回(平成6年1月17日)

「今、思うこと」

広島経済大学

川村 毅

第9回(2月16日)

「主体性を持つ」

前広島県議会議員

亀井 郁夫

第10回(4月26日)

「運命と生き方」

占術家

藤木 蘭

平成6年度

【2期生】

第1回(5月31日)

「緊張感をもった生活」

前広島市会議員

中原 好治

三健物産

岡本 英昭

第2回(6月21日)

「これからの学生のあるべき姿」

TSSテレビ新広島

村上 隆治

第3回(7月12日)

「今、ここで生きている」

株式会社キウイ

池田 好隆

第4回(9月20日)
「あなたも大切、私も大切」
親業訓練シニアインストラクター
植木 マユミ

第2回(6月15日)
「性と生」
河野産婦人科クリニック
河野 美代子

第5回(10月27日)
「警察と警察官」
広島県警察本部
松岡 一正

第3回(7月6日)
「企業」
広島管財株式会社
中村 誠吾

第6回(12月15日)
「潜在能力」
キウイ浜松
船川 明雄

第4回(9月25日)
「自動車産業」
株式会社バルコムヒロシマモーターズ
山坂 哲郎

第7回(11月15日)
「どう人とつきあうか」
己斐商事
河野 高信

第5回(10月25日)
「サラリーマンの能力開発」
社団法人日本経営士会
瀬戸 武治

第8回(平成7年1月12日)
「仕事のできる人間とは」
中国新聞社
富沢 佐一

第6回(11月30日)
「インターネットについて」
広島経済大学
山本 雅昭

第9回(3月14~17日)
「阪神淡路大震災」のボランティア活動

第7回(12月11日)
「社会人としてのマナー」

第10回(4月26日)
「人に愛される個性」
タレント

広島総合銀行
金谷 信子

松本 裕美子

第8回(平成8年2月6日)
「心豊かな人間であれ」
広陵学園

平成7年度

二宮 義人

【3期生】

第1回(5月25日)
「対人関係」
仏通寺持地庵住職

第9回(3月11日)
「私の経験」
株式会社ポブラ

浜田 徹道

目黒 俊二

平成 8 年度

【 4 期生】

第 1 回（ 5 月 23 日）

「就職戦線を勝ち抜くために」

株式会社みどり

中村 祐二

第 2 回（ 6 月 17 日）

「個人と集団について」

株式会社キリンビール中国支社

宇田 亮一

第 3 回（ 7 月 11 日）

「面接時の自己表現の仕方」

RCC 中国放送

藤尾 めぐみ

第 4 回（ 10 月 9 日）

「エフピコ方式のトレー TO トレー」

株式会社エフピコ

松尾 和則

第 5 回（ 11 月 20 日）

「何か始めたくて……」

広島ホームテレビ

酒井 立夫

第 6 回（ 12 月 16 日）

「就職活動について」

株式会社リクルート中国支社

青山 明美

第 7 回（平成 9 年 2 月 10 日）

「ひろしま国体について」

ひろしま国体局

久傳 昌典

第 8 回（ 3 月 26 日）

「起業について」

株式会社ブローバ

平本 将人

所属は講演当時によるものです。あらためまして、全ての講師の方々に、厚く御礼申し上げます。

大哉乾元 V

1999年3月1日 発行

編集・発行 岡本貞雄ゼミナール 5 期生

〒731-0192 広島市 安佐南区 祇園5丁目 37番1号

広島経済大学岡本貞雄研究室

TEL 082 (871) 1000【大学代表】 / 082 (871) 1476【研究室直通】